
とある新任教師の受難【けいおん！二次創作】

まさきち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある新任教師の受難【けいおん！二次創作】

【Nコード】

N3464Q

【作者名】

まさきち

【あらすじ】

本当は野球部の監督になるために、高校教師を目指していたのに…、就職難の煽りを喰い、女子校である桜が丘高校に就職するしかなかったとある新任教師（♂）のお話。

●「けいおん！」の二次創作小説です。

●男オリ主は教師という立場です。

●基本原作沿いで進めます。物語から大きく剥離する事は多分…ない。

- ハーレム展開にはなりません。
- 恋愛要素は…どうしようかなあゝ
- 文章力には期待しないでね！！

その0！（前書き）

「けいおん！」二次創作小説です。以下注意事項。

- 男オリ主は教師という立場です。
- 基本原作沿いで進めます。物語から大きく剥離する事は多分…ない。
- ハーレム展開にはなりません。
- 恋愛要素は…どうしようかなあゝ
- 文章力には期待しないでね！！

そんな訳で許せそうな方は本文へどうぞゝ

その0！

『野球部を率いて甲子園に行きたい』

これが、俺が所謂【高校教師】になりたかった大きな動機であった。

まあ、なんと云うかこの就職難である。

崇高な「聖職者」としての大きな理想を求めた者も中にはいるだろうが、大抵の学生は「安定した生活」を求めて教師を目指す。という者がほとんどであると言っても過言ではない。

あるいは「就職活動に有利になるから」という理由で、大学の教職課程を履修する者も多かったはずだ。

だが、俺はそんな社会的安定を求めて教師を志した訳じゃない。とにかく、高校で野球部の監督となって甲子園に行きたかったのだ。

こんな事を思うぐらいだ。勿論俺は高校時代は野球部に所属していた。

県立校ではあったが、県下では強豪と呼ばれる高校で、部員も全学年合わせて100人以上はいた。

俺はそんな中でレギュラーの座を勝ち取り、本気で甲子園を目指していた。自分で言うのもアレだが、俺は熱い高校生活を過ごしていたのだ。

仲間と競い合い、意識を高め、夜が暮れても練習に打ち込んだ。

しかし、とうとう在学中にその夢が叶うことはなかった。

高校最後の年、夏の予選決勝まで進んだものの、私立のライバル校に破れたのだ。

死ぬほど悔しかった。最後のアウトを取られ、スコアボードに×印が表れた瞬間、負けたという現実を受け入れたくなくて、涙が溢れた。

青春を捨ててまで野球に打ち込んだんだ。一つの敗北だけで引退だなんて、そんな現実が許せなかった。

俺の甲子園への執着は人一倍大きかったのだろう。俺は次の目標を既に見据えていた。

引退した他の部員達が、残りの夏休みを満喫する中、俺は直ちに受験勉強を開始した。

そう、良い大学に進み、教職免許を取れば、次は野球部の『監督として』再び夢を追えるチャンスが持てるのだ。

元来の真面目な性格が効を奏したか、受験勉強ははかどり、俺は第一志望の教育大学へ進学を果たす。

その後は大学でも野球部に所属する傍ら、アルバイトはそこそこに真面目に勉学に励み、無事に教職免許を取得する事が出来た。

そう、俺は夢に向けて大きな一歩を踏み出す事が出来たのだ！！

そして、俺は高校教師として、赴任初日を迎える。

「斎藤 裕先生さとうゆうね。

私が貴方の研修担当となりました山中さわ子です。よろしくね」

「はい、よろしくお願いします」

山中さわ子と名乗った先輩教師は、とても美人な女性だった。学校のマドンナなんて呼ばれているのかもしれない。

実際、直前の教頭先生の紹介によると、生徒からも非常に人気の高い教師らしい。ま、この容姿なら納得する。

「それじゃあ、まずは校内の案内から始めますね。着いて来て下さい」

「はい」

当たり障りなく一通り校内の案内を終えて、職員室に戻る最中、山中先生はこんな事を聞いてきた。

「ところで、斎藤先生は何故教師を目指そうと思ったんですか？」

「やはり来たか。と思う。初めての職場での新人に対し、こういった動機を聞くのはまあ当然か。」

しかし、俺には答えたくない理由があった。

「あの…、すみません。正直申し上げ難いのですが…」

「……？」

やはり山中先生は俺の返答に対して不思議そうな顔をしていた。
俺が黙っていると、気を使ったのかこんな事を言ってきた。

「まあ、別に何だって良いんじゃないかしら？ 私なんか、当時付き合っていた彼氏が『俺、教師になる』なんて言うものだから『じゃあ、私も』なんてノリだったわよ？」

「はあ…」

それも教師になった理由としては盛大なクエスチョンマークが付かざる得ないが…、それでも俺の状況に比べれば、まだ健全なような気がした。

「あの…、笑わないで聞いて頂けるのでしたら…」

まあ、良い人そうだし、言っていていいかな…。

「ええ、どうぞ」

「野球部の監督になって、甲子園に行きたかったんです」

「……ぷっ！！」

俺の一言に、山中先生は盛大に吹き出した。
くっくくくくくと腹を抱えて笑いを必死に堪えている。

…まあ、当然の反応だよな。覚悟していたとは言え。

「笑わないって言ってましたよね？」

俺の一言に山中先生は「ごめんごめん」なんて言いながら手をヒラヒラさせてくるが、未だに表情は崩れていた。
どうやら彼女にとって相当なツボに入っただらしい。

「ごめんなさいね斎藤先生。あまりにも予想外だったわ」

ええ、そうでしょうね。

「そうね、野球部の監督で甲子園。
高校教師を目指すには立派な理由ね。バカにしてるつもりなんて
一切ないのよ？」

…ええ、そうでしょうね。

「ただねえ、どうしてもその理由は笑っちゃうかな」

……ええ、そうでしょうね。

「だって、ウチの高校…桜が丘高校は…」

『女子校』なのよ?」

ええ知っていますとも! そんなことあ俺が一番良く知っているんですよっっ! (泣)

その0！（後書き）

とうとう「けいおん！」に手を出してしまった。

てかごめん、はっきり言う可他連載中小説があまりにも進まないの
で現実逃避的に書いた小説です。

こっちの方がアイデアばしばし浮かんで来るんではらくこっちの
連載が主になるかも…。連載放棄には定評のある筆者ですので、生
暖かい目で眺めてくれると幸いですm（＿）（＿）m

その1！

「うわぁ、ここもダメかよ！ちくしょう！！」

俺はそう叫びながら、所謂『不採用』の旨が書かれた薄っぺらい紙と封筒を八つ当たりの如くに引き裂いた。

「くそ、社会科教師は人余りが激しいと聞いていたが、まさかここまで苦勞する羽目になるとは…」

俺が封筒ごと引き裂いた紙はいつたい何枚目になるのだろうか？5校目辺りからもう数えるのを止めたので、その数はもう覚えていない。

俺、斎藤 裕 は、昨今叫ばれる就職難の現状を肌で感じまくっていた。

最初は公立校の教諭を目指していたので、地元の県を初めとして、近隣の県や市の教育委員会の採用試験を受け続けていたんだが…。

この状況で言うまでもない。全滅した。

しかも我が母校の野球部監督め！

「お前の事は俺が推薦してやる！大船に乗った気でいろ！」とか俺に言っておきながら簡単に落ちてんじゃねーか！

推薦サギだ！受験料返せ！！

…しかしながら敗因は俺にもあった。

教員採用試験を受ける奴は、ほとんどの奴が予備校の対策セミナーを受講する。

運が悪いのか良いのか、高校時代は予備校ナシで現役合格を果たしてしまっていた俺にとって、予備校を軽視していた事実が否めない。

実際、独学だけで頑張っていた訳だが、そのお陰か筆記試験の内容はお世辞にも満足行くものではなかったのだ。

だが、社会の不条理さに憤慨し続けてもラチが空かないので、俺

は私立校へと目標を変える。というか変えるしかなかった。だって公立が全滅してんだもん……。

正直言つと「野球部監督」を目指す上で私立校はあまりよろしくない。

何故なら、甲子園を狙えるような強豪は、教諭が監督というケースは多くないのである。

つまり、ほとんどが他校で実績を持つ「雇われ監督」のケースが多いのだ。

要するに、私立校では単なる教師に過ぎない俺（あくまで予定）がチームに関われるようなチャンスは少ない。

それでも、ここまでの学費やなんやらで両親には相当迷惑が掛かっている。就職浪人という最悪の事態だけは避けたかった。

ニート、フリーター、派遣切り問題……

新卒の俺ですらこんな状況なのに、世の中の求職者は更に酷い状況なのだ。

せつかくここまで頑張つて来たのに、こんな所で没落する訳にはいかない！

そんな訳で一念発起するしかなかった俺は、私立校の二次募集へ手当たり次第にエントリーしまくった。

「ぐああああ！！また落ちたああああ！！ここが！最後の！頼みの綱だったのにiiiiiiii！！！」

累計数十枚は優に超えていただろう憎むべき不採用通知入りの封筒。俺は、最後の1枚になるであろうそれを、怨念を込めてこれでもか！というぐらい細かく引き裂いた。

「はあっ！はあっ！はあっ！糞が！思い知ったか！！！」

ごめん、自分で言う事ではないが、この時期の俺は、度重なる就活の失敗に情緒不安定になっていた。

普段はこんな言葉使いはしない。いや、本当に。

「これで…全滅…。本当に全滅…。そうか俺の夢は潰えたか…」

がつくりと頂垂れる俺。

しばらくそのままだった視線は、徐々に、机の上の、珍しく綺麗に置いてある1つの封筒に向かっていった。

ヨロヨロとした足取りで机に向かうと、その封筒の中身を取り出し、内容を眺める。

そこにはこう書かれているのだ。

『内定通知』と

そう、俺はこの『私立桜が丘高校』に置いて、実は内定を勝ち取

っていたのだ。

なら、何故ここまで俺は落ち込む必要があったのか？

「だってここ…『女子校』じゃん…」

見境なくエントリーしまくっていたせいで、まさか気付かずに女子校まで受けていたなんて…。

しかも、そこしか内定を貰えなかったただなんて…。

なんてことだ。死にたい。

桜が咲き誇る4月某日。

この日は我が桜が丘高校に、新たな新入生を迎える『入学式』の日である。

つまりは、この1年生達と一緒に俺の教師生活がスタートする訳だ。

普通の新人教師なら1年生達に、初めて教える生徒達として多少は思い入れを含むものであるうが、いかんせん俺は普通の経緯を辿ってこの学校に来た訳ではない。

徐々が増えてくる新入生の女子生徒達を眺めれば眺める程、思わず呟いてしまうのだ。

「どうしてこうなった…」

で、そんな風に未だに後悔の念を、周りには隠しながらも引きずる俺が何をしているかと言うと、『警備』の腕章を付けて校門の前で立っているだけである。

入学式の準備は今頃、緒先輩方が滞りなく進めている最中であるう。

言わば先日入学したばかりの「新入生」である俺にとって、こういった行事に仕事はないのだ。

で、警備である。つまり体良く追い出されたに近い。ま、何もわからない新人がウロウロされても困るってのが本音だろう。

ちなみにこの腕章は、研修担当となった山中先生が持って来て俺に渡した。

『本当はちゃんとしたのがあるんだけど、見つからなくてね。これ、被服室で私が作ったのよ?』

なんて言っていたな。やけに既視感に溢れた腕章である。まるでどっかの某団長が付けているような…。

ま、そんな訳で警備と称したサバタージュを絶賛実施中の俺である。

しかし見る角度によっては、校舎を覆い隠すぐらいあるんじゃないか? と思ってしまいう桜の密度だ。流石「桜が丘」の名前は伊達ではないらしい。

そんな事を考えながら桜を眺めていると、強い風が吹いた。

桜の枝が舞い、花びらが散る。校舎の時計に日の光が反射して、花びらがキラキラと光っているように見えた。

こんなふて腐れた新任教師である俺から見ても、その光景は幻想的だった。

そんな時だったんだ。

1人の女子生徒が俺に声を掛けて来たのは。

「あのっ！！この高校の先生ですか？」

声のした方向に向いてみる。その女子生徒は何故か息を荒げている。
走ってここまで来たんだろうか？何を慌てているんだか。

「…そうだけど、どうかしたの？」

「ち、遅刻してごめんなさいっ！！もう入学式始まっちゃってます
よね！？」

そう言って、茶色いショートボブヘアの女子生徒は俺に向かって
頭を下げるんだが…。

「何を言っているんだ？後1時間弱は余裕があるぞ？」

「…ふえ？」

「ほら」

そう言って俺が時計を指すと、女子生徒は呆然と時計を眺めていた。

「み、み、みま……」

「見間違えたああああ！！！！」

——サワサワサワサワ

再び風が吹き、桜が舞い散る。

が、俺にはその女子生徒の絶叫が、桜を舞わせたんじゃないかと思ってしまった。

それぐらい、よく通る声だった。

「…えへへ、あの、ごめんなさい」

「——ま、災難だったな。あそこの掲示板にクラス割が載ってるから、時間まで体育館で待ってなさい」

「…はい」

やはり相当恥ずかしかったのだろうか。やけにもじもじしてしまった彼女は、トテトテとでも聞こえて来そうな足取りで掲示板に向かって行った。

「……不思議な子だったな」

そんなこんなで時間が経つに連れ、生徒がどんどん増えてくる。当然ながらここは女子しかない。

学校敷地内、校門前、通学路。そこには女子、どこを見ても女子、どう見回しても女子。本当に女子の光景しか映らない。

今更ながら女子校に赴任してしまったんだと実感する。

「正直、未知の世界だな……こりゃ」

「斎藤先生にとってはそうでしょうね。」

でも、あんまり鼻の下伸ばし過ぎて問題を起こさないようにお願いしますね？」

「うわっ！山中先生！？」

いつの間に…全然気付かなかった。

「そろそろ職員会議です。向かいましょうか？」

「は、はい」

（この女、出来る…！）

無駄に俺の第6感が働いた気がした。

——が、この直感があながち間違いじゃなかったと気付いたのは、もう少し後になってからだっただがな……。。

その1！（後書き）

とりあえず1話目。

前半はオリ主設定の説明会みたいな感じです。その中で何か違和感を感じたならきつとアナタの判断は正しい。

でもあんまり細かく突っ込まないで欲しいなあ…なんてw

あ、ちなみに斎藤先生の名前の由来は、勿論某ハンカチ王子からです。

その2！

【SIDE：さわ子】

「新任の斎藤先生の件ですが
山中先生に研修を担当して貰う事になりましたのでよろしく
お願いします」

「——はい？」

翌日に新任教師の赴任を控えたとある日。
私を呼び出した教頭の言葉には、正直我が耳を疑った。

「え、わた、私ですか!？」

「はい、適任だと判断しました」

「ちょっと待って下さい！私なんてまだ教師になって3年目で…
新人の教育でしたらもつとベテランの先生の方が！」

私は自分の担任クラスを持っている訳でもないし、音楽教師故、
受け持つ授業も少ない。
教師としてのスキルは、まだまだペーペーも良い所だと自覚して
いた。

「もちろん、それなりの理由はあるんですよ」

「聞かせて下さいっ！」

「斎藤先生は、男性だよね。それで我が桜が丘高校は女子校。普通ね、若い男性が女子校に赴任してくると、残念ながらその下心を持っている場合が多いんですよ」

「…はあ、それなら！」

「まあ、最後まで聞いて下さい。

確かにそういったケースであれば、厳しいベテランの教師を付けるのがベターです。山中先生に声が掛かる事がなかったでしょう。

しかし彼…、斎藤先生は何が違うんだよね。内定後に彼とは一度面談をしているんですがね？

全く覇氣がないんですよ。普通、念願叶って教師になる事が決まった。なんて人間はやる気に溢れてるのが端から見てもわかりますよね？

しかし、彼には余りにもそれがない。不本意ながら内定取消しすら考えてしまう程でした」

「はあ…」

「まあ、最終選考を行なった理事長や校長に確認した所、なるほどとも思える理由が見つかったんで、そこまでには至らなかったんですがね」

「それこそ、何故私に…、そもそも斎藤先生は社会科の教師ですよ？担当も違つとなると」

「アナタが学校のマドンナだからですよ。山中先生」

「はい！？」

正直、少し恥ずかしい。

この教頭は本人を前にしてなんて事を言っているのか？

でも、私が無理をしてまで通していた『おしとやかキャラ』が実を結んだ瞬間でもあったので、やはり少し嬉しいかも…。

「ま、そんな訳で山中先生には、彼に『桜高も捨てたもんじゃない』って事を教えてあげて欲しいんですよ。

今後の事を考えれば、これはアナタにとっても良い経験になるはずです。

山中先生、引き受けて頂けますね？」

「は、はい。わかりました。それでは…」

そう言って、私はその場を離れようとしたのだが

「ああ、でも山中先生、彼の前であまり『地』は見せない方が良いでしょう？」

「な…！？

わ、わかってます！」

にやにやとした笑みを浮かべる教頭を背に、私は足早にその場を去った。

そう言えばこの教頭、私が在学中の時は学年主任だったのよね…。堀込のオヤジといい、教頭といい、何だか嫌味を握られているようにで尺に触る。

はあ…。

【SIDE：裕】

「——でね、教頭先生が『余りにもやる気のない教師がやってくる』なんて言うものだから、

私、正直斎藤先生には身構えてた部分が多かったんですよ？
うわーこれは責任重大だなあって」

「いや、なんかその…申し訳ありませんでした」

「まあね、『野球部の監督』を目指して教師になったのに、赴任して来た先が女子校つてのもね？

ふふ、やる気をなくすには十分な理由よね」

「いや、あのちゃんと仕事はしてますよ？」

そう弁解するも、山中先生は未だにくすくすと笑っている。

しかし、『余りにもやる気のない教師』って…。そうか、俺はそんな評価だったのか。明らかに自己責任なのは違いないが、今となると、あの内定後に実施した教頭先生との面談を黒歴史に封印したい気分である…。

あの態度は流石にないよな。

まあ、はつきりと言ってしまったえばやる気がないのは絶賛継続中なのであるが、俺も社会人の一員として、割り切る所は割り切ってやるべきだというのを心得ている。事実、授業などは真面目にやっているつもりんだけどなあ…。

そんな訳で、新学期が始まり2週間が過ぎていた。
社会科教師である俺は『日本史』の授業を受け持ち、現在は1年生と2年生の半分ずつを担当している。

実際、授業をやり始めて何が一番大変かと言うと、単純だが生徒の顔を覚えなければならぬ事だった。

なんと言つか、今まで汗が弾ける男体育社会（ウホツ的な意味ではないぞ）に身を投じていた俺にとつて、1クラスたつぷり女子しかないという光景は、当然ながら違和感たつぷりなのである。

多少誇張は入っているが、ホント机に並んだ女子の顔が全部同じ顔にしか見えない。全く困ったものである。

しかし、そんな俺でも1人だけしっかりと顔を覚えた生徒がいた。

「あの一、斎藤先生！」

噂をすれば、と言うかもの思いに老けていればなんとやらってか。

「おう、今日は平沢が当番か？」

「はい！」

俺に声を掛けて来たのは、俺が唯一はつきりと顔を覚えた生徒第1号『平沢 唯』だった。

というか、こいつの顔は知っていた。

なんせあの入学式の日。

校門まで全力疾走でやってきた拳句、時間を勘違いしていた事に気付いて、俺の目の前で叫んでいたあの女子生徒だったからな。

ここまでインパクトがあれば流石に印象に残る。

他の生徒達もそれぐらい俺に対して、印象付けを働くべきであろう。

…いや、それはそれでウザいか。

「じゃこのプリント、みんなに配っておいてくれ」

「は、はい！」

そう俺がプリントの束を渡すと、平沢はおっかなびっくりな様子で受け取る。

「おいおい、大丈夫か？」

今にもバサツと落としそうな様子に半ば呆れながら聞いて……

「は…、あつ、あうつ…！」

バサバサバサバサ…！！

恐らく「はい」と言おうとしてたものの、案の定落としやがった。

「あわわっ！ご、ごめんなさい！ごめんなさい！」

そう言っただけで慌てて拾い始める。

俺も黙ってその光景を眺めているだけなのはキマリが悪いので、一緒に拾ってやった。

「ほら平沢、気を付けて持って行けよ？」

「はいっ！ありがとうございます」

平沢はそれだけ言っただけで慌てて去って行った。忙しいやつだな。

「あら、斎藤先生。あれだけ『生徒の顔が覚えられない』なんて言っていたのに、平沢さんの顔はわかるのね？」

先程の一部始終を見ていたであろう山中先生が俺に話かける。何故ならに彼女のデスクと俺のデスクは隣合っているからだ。

「まあ流石に…。あの生徒は色々な意味で目立ちますからね。山中先生も平沢の事はご存知だったんですか？」

「はい。私も1、3の授業を受け持ってますから。それであの子だったらこの前、私の前でも渡したプリント全部落としちゃってね。

まったく同じ状況だったから少しおかしくって」

「そ、そうだったんですか」

なんと言つか恐るべき平沢唯。授業でも薄々感じていたが、『少し抜けている』という形容では生ぬるいぐらいに『抜けている』生徒であつた。

先生、他人事ながら平沢さんの将来が心配です…。

「あーそう言えば、あの子。軽音部に入るなんて言ってたわね。楽器なんて出来るのかしら？」

「軽音部ですか。

軽い音楽だから適当にやればいいとか考えているんじゃないですか？」

俺は冗談のつもりでそう言っただけなんだが

「——あり得そうだから困るわね」

そうコメントを挟む山中先生は何だか哀れみの表情を浮かべていた。

本当に大丈夫か…平沢唯…。

「あ、部活と言えば斎藤先生。貴方もどこかの顧問をやってみるのもいいんじゃない？」

野球をやってたんなら、ソフトボール部とか」

「それも考えたんですが、僕には無理ですね」

「どうして？」

「男だらけの青春時代でしたからね。」

——正直、女子との付き合い方がわからないんです」

「貴方、本当よくウチに採用されたわね……」

いや、ホント。俺が問いたいよ。

その2！（後書き）

今作は実験作、及び習作的な側面を持たしてやって行こうと思っています。

そんな訳で批評的な感想を皆さまから心よりお待ちしている次第です。

とりあえず今回は視点変更にチャレンジ。いかがでしたでしょうか。

次回以降は三人称文章なんてもんも書いてみたいと思います。

その3！

【SIDE：裕】

「貴方、本当よくウチに採用されたわね…」

とある日の昼休み。

ひよんな事から『女子生徒との付き合い方がわからない』という旨の発言をした所、山中先生からそんな言葉と哀れみの視線が返って来た。

その哀れみレベルは、先程話題に上がっていた『平沢 唯』に負けず劣らずである。

なんかシヨックだ…。

「そう言えばね、堀込先生が言っていたのよ。」

『普通の新人は授業を通して積極的に生徒とコミュニケーションを図るもんなんだがな？』

斎藤にはそれが一切見られない。あんな淡々と授業をこなす新人は始めて見たぞ』

——つてね。

今考えると、貴方、女子生徒が苦手だからそんな授業スタイルなのね…？」

はい、おっしゃる通りでございます。
反論の余地は一切ございません。

いや、しかしホントにね。『なんでこの高校に採用されたのか』
なんて、俺が沖山校長や理事長に問い詰めた気分なんですよ。

本当、なんで俺なんか採用したんだろう？

俺がここの面接で、沖山校長に志望理由に聞かれた時
『野球部の監督になって、甲子園に行きたいんです！』
とかバカ正直に答えてたりとかもしてたんですよね…。

流石にその発言をした際は、面接官だった理事長と沖山校長はポ
カーンとした顔をしていたな。

そして『あの…ウチは女子校なんですが』という戸惑いながらの
説明を聞いて、俺は初めてこの桜高が女子校だというのを自覚した。
あの時は本当、顔から火が吹き出す程に恥ずかしかったものである。

とまあそんな感じの話を山中先生にした訳だが、

「ちょっと貴方、それ、いくらなんでも冗談でしょ？」

これには流石に山中先生も驚いている。

「いや、それが冗談でもなんでもないんですよ」

「謎は深まるばかりね…」

山中先生は盛大にため息を付いた。
大丈夫です。俺も本当同じ気持ちなんですって。

■
■
■
■

——時は遡る。

桜が丘高校の理事長室では、翌年度採用の教員最終選考の面接を行っていた。

面接官は、白髪のパーマ頭をした優しそうな風貌の初老の男性である沖山校長と、同じくパーマ頭であるが髪は茶色に染めてあり、メガネをかけた初老の女性である西崎理事長の2人であった。

桜が丘高校に置いて、教員最終選考では学園のトップ2人による面接が行われる事が、半ば伝統になっているのだ。

「失礼します」

「はい、どうぞ。」

——えー、斎藤 裕 君だね。座って下さい」

「はい。失礼致します」

そう言って席に座る人間に対して、面接官である沖山校長と西崎理事長は、驚きの表情を隠せなかった。

まあ、当の本人はガチガチに緊張していたので、それを知る事は一切なかったのだが。

手元のエントリーシートを確認しながら、沖山校長はこんな事を口にする。

「斎藤君はW高校、N教育大学と野球部に所属していた。というのは間違いないよね？」

「はい。間違いありません」

「ちなみに…ポジションはどちらを？」

「…？」

えっと、ピッチャーですが」

その返答に、沖山校長と西崎理事長は顔を見合わせ、お互い小さく頷いた。

そこにはこんなメッセージが含まれている。

間違いない、『あの斎藤』だ。と。

そして同時に疑問が膨らむのである。

しかし『あの斎藤』が何故、我が桜が丘高校の教員採用試験に来ているのか。

志望理由を聞く事がテンプレートなのは違いないが、沖山校長はそれが早く聞きたくて仕方がなかった。

「——それでは、斎藤君。

君は何故、我が桜が丘高校の教員に志望したのですか？」

裕はゴクリと息を飲んだ後、口を開いた。

この発言は、沖山校長、西崎理事長、共に数々の教員候補と面接して来た中で、史上初めて聞いた志望理由になった。

恐らく、この先も聞く事がないであろう。
桜が丘高校が『桜が丘高校』である限り。

「野球部の監督になって、甲子園に行きたいんです！」

これがコントであったなら、二人とも壮大にずっとかけていたに違いない。

■
■
■
■

「――し、失礼いたしました…」

面接が終了し、ゆでダコのように顔を真っ赤にしていた裕が退室して行った。

いくら焦って見境ナシにエントリーしまくっていたとは言え、まさか『女子校』に応募していたなんて彼には思いもよらなかったのである。

事実、あの後は面接と呼べるような建設的な話し合いにはなっていない。

もう、ここまで来ると立派な悲劇であった。

「さ、さて、理事長。いかがなさいます？」

未だに困惑した表情を隠せない沖山校長は、西崎理事長に対してそう問いかける。

西崎理事長は思案顔のままであったが、こう発言した。

「…とりあえず私は、彼に内定を出しても構わないと思います」

「正気ですか、理事長。」

しかし、内定を出しても、彼が我が校に赴任するとは思えません

ぞ」

それは、裕の人間性を疑う意味での発言がではない。
彼の取り巻く状況を考えれば、仕方のない事であった。

「それでも、我が校に彼が赴任した。という話題だけで生徒を集められる可能性があります。

せっかく彼がああ言っているのです。これを機に、共学化を真剣に検討するのも良いでしょう。

最近の生徒数の減少は、我が校にとっても無視出来ない問題です」

「…はあ、理事長がそうおっしゃられるのでしたら異論はございませんが」

「…ふふ、こうなると、彼が“非常識”な人間である事を願わずにはいられませんね」

そう言いながら、中指で眼鏡の位置を直す西崎理事長。

不適に微笑むその表情と共に、眼鏡がキラリと光ったようにも見えた。

■ ■ ■ ■

その日、茶色の前下がりショートカットにカチューシャをし、おでこがやたら特徴的な田井中 律という女子生徒は、所属する軽音部での部活動を終えると、珍しく寄り道もせずに足早に帰宅した。

「ただいまー！」

律は最低限帰宅した事を母親に告げると、鞆を玄関に放り投げ、靴も乱雑に置いたまま階段を駆け登って行った。

目的は、弟である聡の部屋で調べ物をするためであった。

「ごめん聡、ちょっと入るよ」

「おかえり、姉ちゃん。」

「やけに慌ててどうしたのさ？」

姉の様子がいつもと少し違う事に気付いた聡は、そう姉に問うのだが、その問いに対する答えかそうではないのか定かでないまま、聡にこう告げたのだ。

「聡、“月刊ベースボール”毎月買ってるよね？
ちよつとあれ見せてくれない？出来れば去年の奴！」

「え？別に良いけど…。ほら、その棚」

聡は中学では野球部に所属している。小学校時代も少年野球チームで野球をしていた彼は、所謂『野球少年』であった。

その影響もあって、律は人並みに『野球』というものを理解していた。スポーツとして野球の試合を観戦する事も嫌いではない。

そんな経緯もあって、彼女はある新任教師に対する“違和感”に気付いたのかもしれない。

彼女が一心不乱に目的の内容を探して“月刊ベースボール”を読み漁る中、聡は何故そんな必死になるのかわからないままなので、『どうでも良いけどちゃんと片付けてくれよな』なんて考えていた訳だが。

「これだあ…、あつたああ!!」

「う、うるさいよ姉ちゃん。ホントどうしたのさ？」

目的の内容を捜し当てた律は、喜びのあまりかそうでないのか定かではないが、聡の言葉を見無視してそのページを見せつける。

「聡、この人！知ってるよな？」

「うん？ああ、もちろん知ってるよ」

そのページは前年のドラフト特集であり、写真入りのコメント欄にはこう書かれてあったのだ。

北海道日製ファントムズ、1位指名：斎藤 裕 【N教育大学、投手】

律はそこに書かれた記事を口に出して読んだ。

「えゝなになに…」。

『高校時代は甲子園の出場こそ叶わなかったが、当時からMAX153kmの豪腕でスカウト陣の注目を集める。』

その年のドラフトにも指名されていたが、本人は大学進学を理由に固辞。

大学時代はエースで公式戦最多勝記録を更新。神宮大会でもN教育大学を全国優勝に導いている。

MAX155kmのストレートと、キレのある高速スライダーが武器。制球力も悪くなく、完投に耐えるスタミナも備える。

入団後、即1軍入りが期待されており、間違いなく今期ドラフトに置ける最高の投手と言える』

おい…、なんだと…？」

内容を読み終えた律は、先程の高揚した気分と打って変わって、顔を真っ青にしていた。

「うんホント、凄いピッチャーだよ。

なんでかプロ入りを断っちゃったらしいんだけどね。」

…ってあれ？

姉ちゃん、どうしたの？」

「さささ、さ、聡…。」

おちおち、お、落ち着いて聞いてくれ…。」

「いや、姉ちゃんが落ち着けて。

たがらどうしたのさ？」

「この人、ウチの教師かもしれない…。」

「はい？」

その3！（後書き）

あまりにも不自然な主人公の経歴が明かされる。の巻。

3人称の練習も兼ねましたが、状況説明にはピッタリだったかも。

西崎理事長はオリキャラです。教師関係でオリキャラをあと2、3人は出す予定。

ちなみに聡が野球少年なのはオリ設定って事でご了承下さい。

つか無駄に大風呂敷引いちゃった。これでけいおんらしくするのは一苦労な悪寒。

この作品は実験作、習作と考えて執筆しております。前回に引き続き、厳しいご意見、批評。お待ちしております。

外伝！

——ここで、とある新任教師が新任教師になるちよつと前のお話をお送りしようと思う。

「——はあ！はあ！はあ！」

桜が丘高校の校長である沖山 陽二は、初老ゆえに軽快な走りではなかったものの、彼なりに全力で急いでいた。
とにかく、早く理事長に報告せねばならない事柄があつたのだ。

「り！理事長！！」

ボタン！！

「——沖山校長？」

いったいどうしたのです。そんなに慌てて」

非常に温和な男性であるはずの沖山校長のこの慌てよう、西崎理事長にとってはまさに何事かと言つたような表情で困惑していた。

「じじじじ…っ、っ、これ、これを！ご覧下さいっ！」

そう全く呂律が回っていないながらも沖山校長が差し出したのは、

1つのスポーツ新聞だった。

「沖山校長、少しは落ち着きなさい。
一体何だと言うのです？」

西崎理事長はそう咎めながらも、差し出されたスポーツ新聞に視線を移す。

やれやれ、こんなスポーツ新聞に何が載っているよ——
そんな風に思っていたのだが

「なんですって……？」

1面に載る見出しを見て、彼女は驚愕する。

『ファントムズ1位指名、斎藤 裕 投手（N教育大学）まさかの
プロ入り拒否！！』

——以下、記事原文

ファントムズへの入団交渉が難航していた斎藤 裕 投手（N教育大学）についてだが、ファントムズの茂野FMRは昨日、入団交渉が正式に決裂した事を発表した。

以前より斎藤投手はプロ入りに関して難色を示していたが、球団側は斎藤投手に大きな期待を寄せていた事により、春季キャンプが始まるギリギリまで地道に交渉を続ける方針を発表していた。

しかし、斎藤投手のプロ入りを拒む意思は思いの外固かったようで、交渉継続を断念するに至ったという。

なお、斎藤投手は契約金に破格の1億円が提示されていた。

「——正直、内定は多少冗談のつもりでもあったんですがね。まさかこんな…。ちょっと、困ったわね…?」

「…理事長。」

冗談では済まされない事態になりましたぞ」

このニュースは新聞に限らずTVのワイドショーでも大々的に取り上げられ、彼のプロ野球での活躍を期待していた全国の野球ファンを悲しませる事となる。

もちろん当の本人にも理由を求め、各社から取材が殺到したのだが、以前よりメディアへの露出を極端に嫌がっていた彼は、ほとんど取材に応じる事はなかった。
だが、以前より親交のあった1人の記者にはこう漏らしていたという。

『…僕がプロ野球選手だなんて無理に決まっていますよ。それより高校教師になって甲子園に行く夢があるんです』

斎藤 裕…。

謙虚な姿勢を常に崩さない性格でありながら、ある意味非常識な人間であった。

これまでの活躍を顧みると少し考えにくいのだが、彼は本気で『自分がプロ野球で通用するはずがない』と考えていたのである。

ちなみに、このニュースが報道された際、慌てたのは桜が丘高校の首脳部だけではない。

それは彼が見境ナシに受けまくっていた各私立高校でも同じ事であった。

曰く『こんな事になるなら採用しておけば良かった!』

曰く『誰だ!アイツは絶対にプロに行くなんて言っていた奴は!』
『?』

そんな罵詈雑言が、彼を住居を中心とした半径100km圏内の各私立高校の首脳部を飛び交ったという。

…というか、半径100km圏内って。そんな幅広くエントリーしてたのか。どんだけ焦っていたのかと問いたい。

無論、県内の教育委員会が彼の非採用を決断したのも同様の理由である。

別に彼が教職に向いていないと判断した訳ではない。
本当は、彼のプロ入りを後押しするための措置であった。

それだけ、彼は球界に置いて有望な人材であると見られていたのである。

おまけ

【その頃の裕クン】

「俺が女子校…俺が女子校…俺が女子校…俺が女子校…俺が女子校…

こんな…、こんな事なら…

まだファントムズに行っていた方がマシだっかもしれないのにいいいい！！！！！！」

布団を被り、己の不遇を心の底から叫んでいた。

外伝！（後書き）

この外伝による補完によって、斎藤先生に対するムチャ振りは終わります。

設定がどうしてもおかしいので、穴埋めのつもりで色々書いてたんですがね。

なんか穴埋めたつもりが大きな山になっちゃった気分ですwww

ま、こっからどう物語を動かすかってのも、修行のつもりでやってやるです！

この作品は実験作、習作と考えて執筆しております。前回に引き続き、厳しいご意見、批評。お待ちしております。

その4！

桜が丘高校軽音楽部部长、田井中 律が、桜が丘高校社会科教師である斎藤 裕を知るきっかけとなったのは、実は授業の場ではない。

律が所属している1年2組は、裕が授業を担当するクラスではなく、普通に考えれば接点はないに等しいとも言えた。

それでも律が裕という教師の存在を認識出来たのは、彼女が廃部寸前であつた軽音楽部再設立のために、放課後も奔走していた影響が大きい。

無論、裕が律に軽音楽部再設立のために的確なアドバイスをした訳でもないし、裕を知る事もなかった律が、助言を求めた訳でもない。

それはあくまで間接的なきっかけに過ぎなかったのだが、それでも彼女が精力的に動いていなかったら、律はこの段階では裕の存在にすら気付く事はなかったであろう。



さて、律が幼なじみである秋山^{あきやま} 澪^{みお}を半ば無理矢理巻き込んだ形でスタートした軽音楽部再設立への道は、先日の琴吹^{こといづき} 紬^{つむぎ}の加入によつて大きく前進していた。
非常に喜ばしい事である。

これで集める人員はあと1人になったのだから。

4月末までという、残り2週間弱の期限付きではあるが、要するにあとたった1人が入部を表明してくれば良いのである。
澪や紬も含めて、軽音部設立を目指す面々は決して悲観的な感情を持っていなかった。

昨日はファーストフード店の机上の中ではあるが、作戦会議も行った。
なつた。

そんな3人は、たった今、作戦会議の成果である部員募集の張り紙を学内の至るところに張り終えたばかりであつたのだが――

■ ■ ■ ■

【SIDE：律】

校内の掲示板に部員募集の張り紙を張り終え、音楽準備室に戻るために階段を登っている時だった。

「なあ、律。

ムギ、どこに行ったか知らないか？」

急に立ち止まった漣が、後ろを向きながらそう私に言うて来た。

「あれ？さっきまで一緒にいただろ」

そう言いながら、私も周りを見渡すが、どこにもいない。
はて、ムギは一体どこへ消えた？

「りっちゃん！漣ちゃん！」

と、思ってたら後ろからムギが追いかけて来ていた。

「ムギー、どこ行つてたんだ？」

「どこか張り忘れとか？」

私の言葉に漣が続く。

ムギは小さく首を横に振つて答えた。

「ううん、違うの。」

実はさっきね、私宛に荷物が届いたから、良かったら運ぶの手伝つてくれないかしら？」

「——??」

私と漣は顔を見合わせた。

え、荷物？なんの？

■ ■ ■ ■

さて、ムギに導かれるまま何故か昇降口までやつて来た私達だが、そこには学校内にあつては明らかにおかしいものが鎮座していた。

「——おいムギ。」

これはいつたいなんだ？」

困惑の表情を隠せず問いかける私。

ちなみに隣は隣で絶句している。

「うふふ、ティーセット用の食器棚よ。せっかくだから持って来ちゃったの」

「はい？」

確かにムギはやたら高級そうなティーセットをどこから持ち込み、私達に優雅なティータイムを提供してくれている。

しかしこの時、私はムギがいったい何を言っているのか一切理解出来なかった。

しかしながら、そこにはやたら高級そうな食器棚があるのはかるうじて理解する。

そして周りには単なる生徒用の下駄箱である。

その無機質なはずの風景に佇む高級食器棚の存在は、とにかくアンバランスの一言に尽きる。

「流石にこれを私1人で運ぶのは大変だから、手伝ってくれないかしら？」

「いや、そりゃ別に構わないんだけどさ…」

昨日の作戦会議から、ムギはおっとりぼわだし何だか掴みにくい性格をしているなあ、なんて感じていたんだが、少しその評価に下方修正を入れるべきかもしれない。

ちなみに下方修正を入れた結果の評価は“変な奴”になる。
流石に本人に向かってそんな事は言えないが。

「……………」

ついでに遷は未だに隣で絶句している。

遷、ビビりすぎだ…。

■
■
■
■

その時、斎藤 裕 は、はっきり言ってかなり困惑していた。

「どうです？ 斎藤先生。せっかくですから、ソフトボール部の生徒

達を指導しては頂けませんか？」

「いやあ…林水先生、お気持ちは嬉しいんですがどうも僕には…」

林水と呼ばれる男性教諭の誘いを、やんわりと断る事しか出来ない裕。

この光景は、二人にとっては半ば日常と化していたりする。

年齢40過ぎの中年男性である林水は、ソフトボール部の顧問であり監督でもあった。そして裕の野球人としての経歴を知る1人なのである。

この勧誘は裕の赴任初日から開始され、何度も断るにも関わらず、林水は未だに暇があればこのような誘いを持ちかける。

いい加減、裕も辟易としてるものの、先輩教師を無下に扱う事は出来ないでいる。悲しい体育会系の性であった。

裕は自分がソフトボールに関わる事を一考はしたものの、“女子が苦手”という理由で固辞している。

しかし、他人に嘘を付けない性格の裕は、そんな理由まで林水にきちんと話してしまっていたりする。

無論そんな理由で林水が諦めるはずがなく、むしろそのせいで現在の勧誘スパイラルに陥っている事実を、裕は知らない。

「そんな事言わずに頼みますよ斎藤先生！ね！一度練習に来てもらうだけでいいんです！」

「いや、しかし…」

今日の林水は訪問販売の営業マンの如くやたらと押せ押せモード

であつた。

この状況が続けば、近い内に裕は無惨にも陥落していたかもしれないのだが……。

「——あれ？」

彼にとって逃げ出す口実は意外な所からやってきた。

「——んん？」

裕が急に明後日の方向を向いたので林水も釣られた訳だが、そこには明らかに異様な光景があつた。

「ちよつと律！端しつかり持てよ！落としたらホント大変なんだぞ
！」

「いや漣、そんな事言つたつてこれホントに重い……うぎぎぎぎぎ！」

「二人ともごめんねえ〜」

3人の女子生徒、リボンの色から判断するに1年生のようだが……。やたらと大きな棚を運んでいた。

しかも会話の内容を伺うまでもなく、一目見ただけで危なかったのがわかる。

「なんだありや？食器棚？しかしあぶねえなあ」

「ああー、ちよつとあれは危ないですね。

すいません林水先生、ちよつと行つてきます！」

「あつ！斎藤先生！」

とつさに逃げるチャンスだと判断したのか、それとも元来の人の良さの成せる行動か、裕にとってはそのどちらでもあるんだが――。とにかく裕は、林水教諭の魔の手から離脱する事に成功する。

■
■
■
■

「待て待ておまえら。いくらなんでもその運び方は危ないから」

先程の異様な光景を醸し出す女子生徒達に話しかける裕。

真つ先に反応したのは、その光景を作り出した最要因の人物であった。

「あら、斎藤先生ですか？」

「あ、ああ。そうだが…」

まさか名前が返ってくるとは思ってもよらず、キョドる裕。女子苦手故にだが、男性としては少し悲しい。

「君は？」

「嫌ですわ。斎藤先生。」

「琴吹 紬です。私も斎藤先生の授業を受けてますのに」

「琴吹…？」

「ああ。そうか。ちょっと生徒の顔をまだ覚えられなくてな…すまない」

「ふふ、以後お見知りおきを」

「何だか生徒と教師の微笑ましい会話を聞いているようだが、状況を忘れてはいけない。」

「むーぎー！！頼むから立ち止まらなくてくれえ！！もう限界だああ！！！！」

「漣に至っては言葉を発する事がままならない程、棚を支える事に必死だった。」

「棚を支えるつ手がプルプルと震えている。」

「そんな2人の様子に気付き、何のために話しかけたんだか忘れかけていた裕は慌てる。」

「ああっ！」

悪かった！とにかくいったん立てろ！どこか運ぶんなら俺が手伝ってやるから！」

——かくして律と澪の腕は救われた。

ちなみに紬は片一辺を1人で持っていたのにも関わらず余裕しゃきしゃきであった。

彼女は見た目によらず怪力なのである。

「——で、この食器棚。どこ持って行くの？調理室？」

「音楽準備室です。」

「——はい？」

「はい、音楽準備室です。」

裕には、紬が何を言っているのかさっぱり理解出来なかった！

■
■
■
■

さて、こうして紬が持ち込んだ、曰く『ティーセット用食器棚』は無事音楽準備室への搬入を終えたのである。

で、その一番の立役者である裕は何をしているのかと言うと――

「はい、斎藤先生。
ダージリンです」

「あ、ああ…、すまないな」

音楽準備室にて、絀主催のティータイムに招待されていた。

当然、絀による『せつかくですからお茶を飲んでいって下さい』
という言葉がきっかけであり、棚運びを手伝って貰った手前、律に
も漣にも反対する理由はない。

重ねて、裕が押しに弱い性格であるのがとどめといった所か。

そんな経緯が裕の相席を実現させた訳だが、彼の頭の中には、先
程からこの言葉が反復されている。

『どうしてこうなった』と。

しかし、悲しいかな。絀の煎れた紅茶の味は本物だった。

「これは…、うまいな」

一口つけて、思わず呟く。

「どーよ斎藤先生、ムギのお茶は最高だろう？」

「こら律！先生に向かってなんて言葉遣いしてんだ！」

何故かどや顔の律に対して的確なツツコミをいれる漣。

そんな光景にニコニコと微笑んでいる紬。

それは、女子高生らしい微笑ましい光景に見える事に違いない。
違いないのだが…。

「ここ、本当に軽音部？」

『……………』

彼女らが軽音学部員だと聞いていた裕には、どうしても突っ込まずにいらなかった。

■ ■ ■ ■

【SIDE：律】

斎藤先生は紅茶を飲み干すと、職員会議があるとかで音楽準備室を退室して行った。

——今日、私は斎藤先生に初めて会った。

随分若い先生に見えたが、ムギによるとあいつは大学を卒業したばかりの新任教師らしい。

こう言うのもあれだが、見方によっちゃイケメンに見えなくもない。

ウチは女子校だし、あの無愛想ささえなければ人気が出てもおかしくないんだろーな。なんて印象を持った。

ちなみに、斎藤先生を近くで見た訳だけど、私はあいつに対して違和感を感じていた。

もちろん、あいつがいる間それを表面に出す事はしなかったけど。

——なんと言うか“どこかで見た事ある”のだ。

あいつとは初めて会ったはずなのに初めて見た気がしない。

この感情はなんだ…？まさか前世から繋がる運命の人って奴？

——待て待て。私は漑のようなお花畑女とは違うんだ。なんて馬鹿馬鹿しい。

しかしながら、気になるものは気になる。このモヤモヤした気持ちにはなんだろう？

「なあ漑」

「律？どうした」

「斎藤先生、どっかで見たことないか？」

「あれ？律、お前も？」

「うん。やっぱり漑もそう感じる？」

「うん、なんだろう。どこかで見た事あるような」、テレビかなんかかな？」

「実は有名人だったり？まさかあんな冴えなそーな奴が？」

「律！物言いが失礼過ぎるぞ！」

「へいへい悪うございました漑さん」と

漑と話していた内容は、実際軽口の応酬に過ぎなかったけど、私は心臓の鼓動が早くなって来ているを感じていた。

何かもの凄く答えに近付いているような……。でも1つだけピースが足りない。そんな不思議な感じ。

「——ムギはなんか知ってるか？あいつの事」

「そうねえ……」。

斎藤先生、大学時代は野球をやってらしたそうよ？」

「……！！」

最後のピースが、はまった気がした。

■ ■ ■ ■

【翌日の放課後、音楽準備室】

「へえええ…斎藤先生ってこんなに凄い人だったんだな」

「ああ、私も気付いた時はビックリしたよ。まさか“あの斎藤 裕”だったなんて」

昨晚、愚弟聡の協力により真相の解明に至った私は、その野球雑誌を持ち込み、早速漑とムギに見せていた。

校内があまり騒ぎになっていない事から、これに気付いている人間はまだ少数と見ていいだろう。

教師陣はきつと隠そうとするだろうし。

「でもムギのおかげだよ。ムギが“野球”って単語を言わなかったら私、多分気付かなかったからなあ」

ホントムギには感謝だよ。あんたは偉い！

「そうかしら？役に立てたみたいで嬉しいわ」

うーんおっとりばわむムギちゃん！さっすが良さそうな育ちだねあるね！

——なんだか無意味に賛辞の言葉が次々に浮かんで来るが、それは頭の中のもやもやが解消された結果なんだろうな。

とにかく私は今、猛烈に気分が良い！

「でもムギ、斎藤先生が野球やってたなんて、一体誰から聞いたんだ？」

それは漑からの質問だったんだが。

「やーねえ澪ちゃん。」

私、最初から知ってたわよ?」

『はい?』

私と澪の言葉がはもった。

あれ? ムギさん今、なんだか凄い事をさらりと言いませんでしたこと?

「え、ムギ。なんで?」

「だって私、野球好きだもの。」

本当は夏の大会の応援に行ってみたかったから、近くの共学校と進学先、最後まで迷ってたのよ?」

「へええ…なんか意外。そうだったのか」

うん、私も澪に同意する。流石にムギが野球好きとは意外だったが、そうならそうでちょっと気になる点も出てくるんだよね…。

「でもムギ、なんでそんなに落ち着いてられるんだ?」

「え？何が？」

「何がって…ドラフト1位で指名されるような凄いピッチャーがウチの高校で教師やってるんだぞ？」

「普通もつと大騒ぎするもんじゃないのか？」

私のムギに対する質問は、別におかしくもなんともない極めて自然な内容であると思う。

それにはきつと洩も同意するだろうし、その他一般的普遍的な女子高生だったら大多数が同意すべき事だと私は思う。

わざわざそんな前振りをする訳だから、先に言っておく。

ムギはやはり一般的普遍的大多数の女子高生とはちょっとだけ違うらしい。

多分、ちょっとだけ。

「え？何故？」

「それってそんなに凄い事なのかしら？」

『ム、ムギ…？』

琴吹 紬。

彼女は、私達とはちょっとだけ違う世界に住んでいるのかもしれない。

多分、ちょっとだけ。

その5！

桜が丘高校音楽教諭、山中さわ子は同校教頭曰く『学園のマドンナ』である。

そんな風に言われている通り、彼女は美人な上、誰とでも物腰柔らかく接する事の出来る女性である。

そんな訳で生徒からも人気が高く、ファンクラブすら存在するという。

ただ、それは彼女の『表向きな姿』のみを捉えた上での評価であり、本来はかなりエキセントリックな性格をしている訳だが、とりあえずそれもここでは角に置いておこう。

とにかく学内では「おしとやかキャラ」が身を結んでいる彼女だ。生徒から個人的に相談を求められる事も多い。

その日の放課後も、彼女の元に1人の女子生徒が訪れる。

■
■
■
■

桜が丘高校1年生、平沢 唯は悩んでいた。

（せっかく高校生になったのに、このままじゃなんにも変わらない

よ…)

彼女は中学時代、何か目標がある訳でもなく、日々をただなんとなく過ごしていた。仕事の関係上、彼女の両親は家を空けがちだったが、彼女には大好きな妹がいて、信頼出来る幼馴染みもいる。

だらしのない自分を何かと世話をしてくれる存在に甘えきっていたのだろう。彼女にはその自覚があった。

だから『高校生になったら私は変わる！』

そんな思いを胸に秘めていた彼女は、高校受験を機に一念奮起した。幼馴染みが同校を志望していた影響も大きいが、敢えてランクを上げて自身も桜が丘高校を志望したのだ。

努力家とも真面目とも縁のない性格の彼女であつたが、これと決めたらいつまでも没頭出来る集中力は立派な才能だった。

その才能は見事に受験勉強に発揮され、彼女は無事桜が丘高校に入学する事が出来たのだが――、

(こんなはずじゃなかったんだけどなあ…)

入学しても、何も変わった気がしなかった。

頑張った末に入った高校だ。入学すれば何かが変わる気がしていた。

確かに周りの生徒は幼馴染みを除いてみんな知らない人になった。教師もみんな知らない人になった。勉強する内容も格段にレベルが上がった。

でも、それだけだった。環境が変わっただけで、彼女自身は何も変わった気がしないのだ。

それ故、彼女は悩んでいた。

彼女が山中さわ子とちよくちよく会話するようになったのはそんな折である。

当然だが彼女から見てさわ子は大人の女性だった。

活力みなぎり、どんな生徒からも頼られる姿は魅力に溢れていた。

だから、彼女はこう考えたのだ。

（さわ子先生に私の悩みを聞いて貰おう！きっと良いアドバイスくれるはずだよ！）

そうと決めた唯の行動は早かった。

その日の放課後、彼女はさわ子の元を訪れる。

■ ■ ■ ■

「——なるほどね、何かやらなきゃいけない気がするけど、何をすればいいかわからないのね？」

唯から何だか要領の得ない説明に時折イライラしながらも一通りの話を聞いたさわ子は、彼女の悩みをそのように纏めた。

「はい、そうなんです」

と唯は頷く。

さわ子は唯のクラスでの授業を担当しているが、同時に1年2組の副担任でもあった。

日直の仕事やら授業やらでよくよく接していた訳だが、まだまだ入学したばかりのこの時期にしては妙になつかれてしまったらしい。

「相談があるんです」なんて彼女が訪問して来た時は、何事かと身構えしまったものだ。

ただ彼女がどんな人物なのかはそれなりに掴んでいた。実際悩みを聞いてみると、なんとまあ初々しいとも言つか。彼女は微笑ましい気持ちにもなっていた。

「それなら、やっぱり部活をやるのが良いと思うけどねえ…」

と口にしてみるものの、彼女の普段の行動を顧みるに、失礼ながらもこの子が部活なんて大丈夫かしら？なんて内心よぎる。

「どこかオススメの部活動ってありますか？」

「オススメの部活動と言われてもねえ…」。

色々勧誘は受けたでしょ？新歓だって部活紹介がメインだし」

「なんかどれもピンと来なくて…」

さてどうしたものか。

さわ子は考える。

自身が顧問をしている吹奏楽部に勧誘してみるのも良いかもしれないが、吹奏楽はああ見えて意外とハードな部活だ。演奏技術の習

得はかなりの努力を要するものだし、肺活量を鍛えるため、部員に筋力トレーニングを課する事もある。

学年間ではそれなりに上下関係もあるし、とてもじゃないが目の前の生徒に合いそうな部活だとは思えなかった。

（体育系はきつと無理ね。とすると文化部だけ…）

「あ、そうだ！」

ふとさわ子は思い出した。廃部寸前の、ある部活を立て直そうとしている生徒達がいた事を。

「軽音部なんてどうかしら？」

「けい…おん？」

さわ子の提案に、唯は何か知らない言葉を聞いたような反応する。

「そう。軽い音楽って書いて軽音ね。

1年生しかいない部活だから、きっと楽しく出来るんじゃないかしら？」

「軽い音楽…かあ」

そんな言葉を呟きながら唯は目線を上へ向ける。何かを想像しているらしいが、その反応を見ていると変な勘違いでもしてるんじゃないかと少し不安になってくる。

が、正直な所いちいち説明するのもめんどくさいなんて考えていたさわ子は

「とりあえず、これ渡しておくわね。」

もし入るのなら、入部届けは私が受け取ってあげるから」

気にしないで白紙の入部届けを唯に渡した。

基本適当で大雑把。知られざる彼女の本性の1つである。

「じゃ、私そろそろ吹奏楽部に顔出さなきゃいけないのよ。

ま、一晩ゆっくり考える事ね」

「…わかりました」

そしてさわ子は立ち上がり、「ありがとうございました」と頭を下げる唯に、軽く手を振りながらその場を離れたのであった。

■ ■ ■ ■

で、翌日。

唯は入部届けを記入し、さわ子に渡した。

正直ちゃんと考えた訳ではない。

結局の所「何かやらなきゃ駄目だ」という思いが唯の筆を走らせたのである。

（これで和ちゃんにニートなんて呼ばれないもんね！）

何故か誇らしい気持ちにすらなっていた唯。希望的観測だけで突っ走るのは、はっきり言って彼女の短所である。

確かに状況によっては長所にもなり得るのだが…。

そして、その日の昼休み。

幼馴染みである真鍋^{まなべ}のどか^{のどか} 和にようやく部活が決まったことを報告したのだが。

「……軽音部？」

唯、アナタ楽器なんて出来るの？」

「へ？」

まさしく『軽い音楽』としか考えていなかった彼女にとって、和の杞憂は寝耳に水だった。

「だって軽音部って事は、バンドとか組むんでしょ？」

「え？バンドってあれ？こんな感じでジャカジャカーン！ってやるやつでしょ？」

「ええと…」

ジャカジャカーンのリズムに合わせてエアギターを披露する唯を見て、なんだか目を背けたい気持ちにもなるが、和も伊達に長年唯の幼馴染みをやって来た訳ではない。

「まあその想像で間違いないと思うけど」

ため息混じりにそう言うと、唯は目を丸くした。驚いているらしい。

たつぷり5秒程固まった後、再起動した唯は身を乗り出してこう叫んだ。

「ええー！？

ひどいよ和ちゃん！！

私、ギターなんて出来ないよぉ！？」

何故私が非難されなきゃいけないのよ。という突っ込みを喉元で我慢した和は、唯が軽音部に対してどんな想像をしていたのか聞きたくなった。

「あのねえ唯。アナタ軽音部がどんな活動すると思ってたの？」

「え…？それは“軽い音楽”って言うぐらいだからもっと簡単な事をするんだろって事ぐらいしか」

「…はあ、そんな事だろうと思ったわ」

こんな調子じゃ間違いなく軽音部でやっていけるはずがないわね。なんて思いつつ

今後、唯が何を言い出すか容易に想像出来てしまう和は、頭を抱えたくなったと言う。

■
■
■
■

【放課後】

今日も今日とて無難に授業を終えた裕は、とぼとぼと職員室に向かっていた。

後は日報をまとめて、明日の授業計画を提出すれば、本日の業務は終了である。新人故、学校から任される仕事も少なく、はつきり言ってしまうえば気楽な稼業である現状。裕はどっぴりとぬるま湯に浸かりつつあった。

勿論、それは裕に簡単に辞められては困る学校上層部の思惑が大いに働いている訳だが、そんな事は裕にとって知る由もないのである。

彼の研修担当がさわ子であるのも、実は同様の理由である。

本性を剥き出しにされては大いに困るが、基本人当たりが良く、なおかつ野球なんぞよく知らないさわ子は、裕の近くに置かせるのに打ってつけの人材だったのだ。無論さわ子も裕がどれだけ凄い野球人であつたかなんて知らない。

さて、そんな彼の今の所の難題と言えば、未だに慣れない女子生徒との付き合い方もある。しかしそれよりも彼にとって困るのが、未だに執拗に迫るソフトボール部顧問、林水教諭の存在だったりする。

今日も職員室に入ればヤツは待ち構えている。

どんな言葉なら諦めてくれるのか。そもそもソフトボールと野球じゃ共通点は多そうでも教える方からしたら全く別のスポーツなんだという倫理的な展開を用意せねばならないか…。

あーだこうだと頭を捻らせていた訳だが、

「あー！いたいたっ！斎藤せんせーい！」

廊下を歩く裕の背中を、1つの声が呼び止める。

「あれ？君は…、昨日の」

「ねえ、ちよつと音楽準備室まで来てよ！お茶出すからさ！」

裕は振り向いてすぐに気付いた。

呼び止めた声の主は昨日、偶然に裕が食器棚の運搬を手伝い、知る事となつた軽音部員の田井中 律だったのだ。

「ええ？なんでさ？」

当然、裕は困惑するが

「いーからいーから！ムギも今お茶準備して待ってるんだよ！冷めたら勿体無いだろ？」

「はい？」

とんでもない倫理を展開する元氣娘のゴリ押しに、彼の抵抗はアリの毛程の意味にしかない。

結局、裕は音楽準備室に連れて行かれるハメになる。

まあ結論から言えば、裕は今日も林水教諭の魔の手から逃れる事に成功している訳で、それは不幸中の幸いと捉えるべきだろうか。

その5！（後書き）

今回はなんとなく全編3人称で統一してみました。

とりあえずひっちゃかめっちゃかだった時系列がなんとか元に戻りそうです。

後付け設定に超便利な過去話や未来飛躍。

しかしこれを序盤にぶちかますのは多分僕だけw

心配なのは裕のキャラ立てと遷の空気化。さて、どうしたものか。

この作品は実験作、習作と考えて執筆しております。前回に引き続き、厳しいご意見、批評。お待ちしております。

その6！

【ちょっと前の出来事】

「でもさ、なんでこんな人がウチで教師やっているんだ？」

軽音部（仮）の面々が集う音楽準備室。

律が持ってきた野球雑誌をぺらりと捲りながら、漑はそんな疑問を投げ掛けた。

「さあねー大方不純な理由だろ。『俺も女子校でハーレム！』みたいなさ。」

漑も気を付けないと襲われちゃうかもぞー？ガバア！って」

「…ばばか！そんな恐ろしい事言わないでくれ！」

律の脅しに例の如く怯える漑。

そんな中、律の話に疑問を返したのは紬だった。

「…うーん、そんな事はないんじゃないかしら？」

「どゆこと？」

「だって斎藤先生って、授業は凄く淡々としているし、全然生徒と話そうとしないのよ？」

昨日だってお茶飲んだだけですぐ帰っちゃったでしょ？」

そうなのだ。律の言う通りならもつとチャラそんな性格をしていないとおかしい。むっつりなだけかもしれないが、そんな事もなさそうだ。

裕が女子生徒に対して下心を持っているとはどうにも思えなかった。

「確かに。でもそうなるとますます謎だよな……」

そんな漣の言葉を最後に会話は途切れてしまった。

しばらくみんな思案顔で押し黙っていたのだが、唐突に口を開いたのはやはりと言うか、律だった。

「よし！直接聞くしかないな！」

「へ？」

そりゃそうかもしれないけど何を言い出すんだコイツは。なんて漣は思う。

そして思ったら最後。この中で一番行動力のある人間は律なのだ。

「ちよつと斎藤先生連れてくるよ！ムギ、お茶の用意よろしく！」

「ええ、わかったわ」

「ちよつと待て律！リーっ！？」

漣の制止なぞ律が聞くはずもなく、音楽準備室を飛び出して行ったのだった。

■
■
■
■

そうして律が戻って来たのは、10分もしない内だった。

「へい！斎藤先生一丁！お待ちい！」

バシン！と勢いよく扉を開けて登場する。その隣には勿論裕の姿もあった。

「おい、俺は出前か何か？」

裕のツツコミが虚しく響く。

元気なのは構わないが、教師としての立場からすると、せめて学内の備品は大切に扱って欲しい。

「まーまーいいの！気にするなって！」

それは裕のツツコミに対する答えなのか定かではないが、律はかつかつ！とでも聞こえて来そうな笑顔で、裕の背中をバシバシと叩いて笑い飛ばす。

「…はあ、気にするっての」

裕も流石にため息が出てしまう。

しかし仮にも教師である裕に対してなんというフランクさ。

これが女子校ってやつですか？なにこれこわい。とはこの時の裕の率直な感想である。

「いらっしやいませー」

今、紅茶をご用意しますね」

椅子に座っていた紬は、立ち上がると綺麗な30度の会釈で裕に挨拶をした後、昨日裕と共に搬入した食器棚に向かった。その姿は裕からしたらメイドさんにしか見えない。

「…うわ、律のやつ本当に連れてきたのか」

とにかくビックリした表情をしていたのは洩である。

律の行動が冗談だとは思えなかったが、まさか本当に連れてくる
とは思っていなかったらしい。

しかしながら漑の反応が一番正しい。間違っていない。そんな漑
の様子を察した裕は思う。

「まー、とにかく座つてよ斎藤先生」

困惑する漑を尻目に律は促すが、一番ビックリしているは裕本人
である。

何せどんな理由で連れて来られたのかすらわからないのだ。

「おいおいなんのつもりだよ？」

昨日の礼なら昨日のうちに受けたつもりだぞ？」

「そんなんじゃないって！私達はちょっと斎藤先生とお話したいだ
けなんだから！」

余計に意味がわからない。

「あのね、俺はまだ仕事が残ってんの」

とりあえず抗議してみるが、律はまとも答えず「いーからいーか
ら！」なんて言いながら裕の背中を押すばかり。

そんなこんなで裕は、4つにまとめられた机の上座っぱい位置に
座らされる。

どうやら律にとって裕の意思など全く関係ないらしい。この辺り
の行動力は流石と言わざる得ない。

「…ったく」

とりあえず仕方なしに椅子に座った裕。

この時、呆然としながらもずっと裕を見ていた澪と目が合ってしまった訳だが。

「……！／／」ササッ

思わず目を逸らしてしまった澪。

それは、本来恥ずかしがり屋という彼女の性格を考えれば仕方のない事だった。

（なにこれ地味に傷付くんですが）

しかしそんな彼女の内気な内面なんぞ知らない裕は、あからさまに目を逸らされたとは思えなかった。結構グッサリ来てたりする。

さて、そうこうしてる内にお茶の準備を終えた紬がやって来た。

「お待ちせしましたー。」

今日はアップルティーにしてみました。あと、お茶請けにロールケーキ用意したので良かったらどうぞ」

「あ、ああ。どうも」

紬は丁寧な動作でティーカップと皿を裕の前に置く。なんと準備の良い事か。

なんて思うが、よく見ると各々お茶はもとより、食べかけのロー

ルケーキが置かれていた。

ティータイムの最中だった様子がわかったのであるが

(…ここって軽音部だよな?)

やはりそう思わずにはいらなかった。

さて、出されたものを無下に突き返すのも悪いので、とりあえず紅茶に一口付ける裕。やはり味は素晴らしい。

そんな様子を腕を組んで見ていた律は、そろそろ良いかと彼を連れて来た理由である、疑問について問うことにした。

「さーて斎藤先生。ちょっと聞きたい事があるんだけどさ」

「…なんだよ？」

何事かと思う。律が妙にニヤニヤとした表情をしていたからだ。

「どうしてアンタみたいな人がウチの学校で教師やってんの？」

「…はあ？なんでってここしか…」

内定が出なかったんだからしょうがないだろ。という後に続く言葉を読み込んだ。こんな事生徒にするような説明じゃない。

しかし、律にとって言い淀む裕の様子は、追い討ちをかける口実となる。

「隠そうったって無駄だぞ？もうネタは上がってんだ！」

そう言って、律は裕が記事にされた野球雑誌を開き、ドン！と机に置いた。

「ふっふっふ、私を甘く見ちゃいけないー。」

これ斎藤先生でしょ？」

確信を持って律は問う。それはさながら、犯行を自供させるべく容疑者に迫る刑事だ。

どれだけ裕が焦るか、ある意味楽しみにしていたのだが

「……？」

ああ、それ俺だな。それがどうかしたのか？」

裕はそこに載る記事と写真を一目見て、そう述べるだけだった。

（ん……？なんだこの反応は）

律は少し拍子抜けしてしまう。あっさりしすぎだと。

「プロでも野球出来るような奴が、どうして女子校なんかで教師やっつてんだって聞いてるんだけど？」

「そりゃプロに行かなかったからここにいるんだ」

「だから！そうじゃなくて——」

思惑通りに事が運ばない苛立ちからか、つい律は言葉を荒げそうになる。

が、そこに割って入って来たのは紬だった。

「待つてりっちゃん。こう聞けば良いのよ。」

——斎藤先生はどうしてプロ野球選手にならなかったんですか？」

「ああー、まあ何と言うか。」

プロでやって行けるとは思えなかったんだよな。元々教師になりたいって夢があつたし——

って待て待て。なんでそんな事俺が言わなきゃいけないんだ」

いくら生徒とは言え、そりゃいくらなんでも踏み込み過ぎだ。なんて裕は思った。

実際、理由と経緯を洗いざらい話してしまうと、律が求めているベクトルとは多少違うが、間違いなく爆笑されるのが目に見えている。

裕にもそれなりに羞恥心は持っているのだ。

「むー……」

さて、そうなると困ってしまったのは律である。

これをネタにして慌てふためく裕をいじって遊んでやろうという目論見が崩れてしまった。

どうしたもんかと思案するが、こいつは単なる唐変木なんじゃないかという考えも出てくる。

とりあえず、律はその考えが間違っていないか確かめてみる事にした。

「……それだけ斎藤先生が有名人って事だよ。もしかしたら自覚ないの？」

「はあ？何言つてんだ？こんな事ぐらいで有名な訳ないだろ。別にプロ野球で活躍した訳じゃないんだから」

裕は、そう言い切ってしまった。

（うわあまじかよ…）

律は思いっきり落胆した。間違いなくこいつは単なる唐変木だ。

（すごいこの人ホンモノだ…）

会話にこそ参加しなかったが、漑も律と似たような感想を持つ。あまり野球を知らない漑ですら、裕の凄さはわかるのだ。ちなみにこの『ホンモノ』というのは『本当に鈍感なんだ』という意味を持つ事を付け加えて置く。

（なんでりっちゃん達あんなに落ち込んでるのかしら？）

ただ1人考えのベクトルが違う紬は、明らかに沈む2人を見てそんな感想を持つがそれは致し方ない。

彼女は野球好きで間違いないが、逆を言えばそれだけである。裕の事は知識として知っていただけで、ミーハーではない。

それにどんな有名人が紬の目の前に出てこようと、紬が臆する事はないだろう。それは彼女の育った境遇が大いに関係するのだが、今語る事ではあるまい。

「なんだよ意味わかんない。

むー、なんかつまなくなってきた」

「おいおい勝手に呼んでおいてそりゃないだろ…」

そんな心情を素直に吐露してしまう律に、裕は大いに呆れた。裕からしたら意味がわからないのはこっちである。

さて、どんな訳か室内はすっかり空気が悪くなってしまった。

とりあえず食べるものだけ食べたらもう出て行こう。

裕はそんな事を考え、ロールケーキの消化スピードを上げた時である。

ガチャッ！

「みんな！朗報よー！

さわ子がやって来たのだ。

その6！（後書き）

どーも文章が冗長っぽく見えてしまう。
展開が進まなくてまいったまいった。

その7！

さて、今現在音楽準備室では、律主導による裕に対する尋問が繰り広げられている訳であるが、その案配はともかく、それは彼女達にとってはある意味随分と肝の座った行動であつたと言わざる得ない。

何故なら未だに3人しかいない軽音部はあくまでまだ仮の存在であり、今月中に部員が揃わなければ本当に廃部してしまうのである。

それを知ってか知らずか：まあただ単に律達にとってはそんな事すらいちいち気にしてなかった訳だが：、張り紙だけ貼って後はテイタイムに勤しみ、興味本位の行動を優先する辺り、彼女達（主に律）の性格が見てとれる。

つまり語り部が何を言いたいかと言えば『そんな事どうでも良いからさつさと部員集めんしゃい！』という一言に尽きる訳だが、やはりそんな語り部の心配は杞憂に終わるのである。

そう。山中さわ子がとある人物から預かった真新しい入部届けを手に、音楽準備室に向かつていたからだ。

■ ■ ■ ■

「みんなー！朗報よー！」

そう言いながら音楽準備室に入室するさわ子はその日一番の笑顔を振る舞った。

何せ念願の『もう1人』が軽音部への加入を表明したので、この軽音部は廃部せずに済むのである。

それは、みんなには秘密であるものの、実はこの桜高軽音部OGであるさわ子にとって、我が事のように嬉しい事実だったりもするのだ。

無論、さわ子は軽音部再設立のために惜しまぬ協力をした。部室提供も彼女の力であるし、その手に持つ入部届けに書かれた生徒は、まさしく彼女がきっかけだ。

さわ子は夢想していた。きっと私はこれから賞賛の嵐を浴びるのよ！と。

律達の笑顔よりも自身の願望が先に来る辺り、彼女の性格がわかる訳だがここはあえて突っ込むのはやめておこう。

だが、現実とは非情である。

最初、さわ子が表れた事に対して軽音部の面々は目を丸くしていた訳だが

「あれ？さわ子先生じゃん。どしたのー？」（棒読み）

（あれえ…？）

さわ子は笑顔のまま固まった。

律に態度は非常にぶっきらぼうであり。律に限らずなんだか室内の空気が悪い。煙いとかじゃない。重い。

「…ああ、そうそう！みんなに知らせたい事があって——」

とりあえず気を取り直して口を開くさわ子だが、今度はこの部屋にいてはおかしい人間が視界に入ってしまった。

「——ってあれ？」

斎藤先生！職員室にいないと思ったらなんでこんな所に」

「いや、俺もよくわからないんですが何故か連れて来られて…」

ここには明らかなにおかしい上、この部屋の空気の悪さが自分である事を何となく理解していた裕は、困惑気味に答えた。

「……？まあいいわ」

そこにどんな事情があったかなんて彼女には想像すらつかないが、さわ子はとりあえず後回しにする事にした。

彼女にとって、自身の持つニュースの方が優先順位は高いのである。

さわ子は小さくコホン、と息を付ける。

「それより聞いて！軽音部に入るって子が見つかったわよ！」

今度こそ決まった！彼女は心の中でそう思う。

律達にとっても心待ちにしていたホットなニュースに違いないのだ。

『……………？』

しかし反応はどうにも薄い。何故かみんな首を傾げてこちらを見てるのみである。

（あつるえ…？）

彼女は発言を後悔しそうになった。まさかのただすべり。まさか自身の行為は単なるおせっかいだったのか？

だが、真相は少し異なる。

それは先程まで新入部員の事など一切頭になかった律達にとって、急展開過ぎただけだったのだ。

さわ子の発言を咀嚼し、意味を解きほぐすにつれ、徐々に事の重大さを理解してくる。

「新入…部員…？」

そして、その零の弦きがまさしく導火線に火をつけた。

「ホントに！？」

「やったあ！」

律が飛び上がり、紬が手を合わせて喜ぶ。ようやくさわ子の求める部員の笑顔にたどり着いた。

「さわ子先生！誰？どんな人？」

律はたまらず、飛び付く勢いでさわ子に近付いた。

「はい。これ、入部届けね」

書式にそって完璧に記入された文書を渡す。

「…平沢 唯？」

おお、なんか凄そうな名前だな！」

律はそんな感想を漏らす、文字は女の子らしく丸い可愛い文体だったりする。

どうやら書かれた名前だけでそこまで想像したらしいが、要するに律はただ単に興奮していた。

（凄そうって…）

無論さわ子は律の感想に困惑しつつ、実はあの子はちょっとねえ…。と考えるが、その先は止めておいた。

喜ぶ彼女達の水を差すのも野暮つてもものだろう。

「多分明日から来ると思うから、仲良くやりなさいね？」

「うん！さわ子先生ありがとう！」

さわ子は満足そうに頷く。

「じゃあ、私はもう行くけど…、

斎藤先生、そう言えば林水先生が探し回ってたから早く戻ってあげて下さいね？」

「は、はあ」

正直、それは勘弁して欲しい。

とりあえず返事をしつつ、やっぱもうちょいここに居ようかな…なんて裕は考えてたりする。

「それじゃ、貴方達もお茶ばかり飲んでないで、少しは練習するのよ？」

そう改めて律達にも声を掛け、さわ子は出て行こうとするのだが、それを引き留めたのは紬だった。

「あの、せっかくだからさわ子先生も紅茶飲んでいきませんか？」

「あら、悪いわよ」

「いえ、大した手間じゃありませんから。

それに、まだお菓子が残ってるんです。余らせるのも勿体無いので…」

新入部員がいつ来ても良い様、紬は常にお菓子を多めに持参していたりする。

結局今まで自分達3人だけで消化していた訳だが、彼女達も花の乙女。そのカロリーの的な意味での危機感、重々承知しているのだ。

「うーん、そうねえ…。

じゃあせっかくだから一杯頂こうかしら？」

特に断る理由もないのでさわ子は承諾する。
ちなみにお菓子の誘惑は、十分に効果があった事を明記しておこ
う。

■ ■ ■ ■

「どうぞさわ子先生。お待たせしましたー」

程なくして紬はさわ子にも紅茶とお菓子を振る舞う訳だが、さわ
子は出された物体に驚愕する。

「ええ！？これ六本木にある超高級洋菓子店のロールケーキじゃな
い！？一本数千円は下らないというあの……。
た、たたた食べちゃって…いいの…？」

（（えええ！！？））

“美味しいロールケーキだなあ”ぐらいにしか考えず、バクバク食
べていた他3名は揃って顔を見合わせた。

そこまでの高級品だったとは思っていなかったらしい。

「ええ勿論。知人からの貰い物ですし、気になさらないで下さい」

「そ、そう？ありがとうございます。頂くわね」

「はい。よく味わって下さいね」

せつかく細もこう言っている。

遠慮する事はないと頭では理解しつつ、経済的には結局ただの1
社会人に過ぎないさわ子は、遠慮がちにフォークを差した。

（ムギっていったい…？）

その度、律と漑がこう考える光景は、もうそろそろお約束である。

その後しばらく他愛もない会話が続くが、さわ子は唐突にこう切り出した。

「——そう言えばさっきちゃんと聞けなかったけど、なんで斎藤先生がここにいますか？」

別にこの教師が下心で動くような人間じゃないのはわかっている。
それはさわ子の純粋な疑問だった。

「…いえ、俺もホントよく分からないんですよ。
とにかく彼女達に連れてこられたからここにいます」

そう言ってチラリと律に視線を向ける。

そこには非難の意思が込められていた。変に勘違いされたらどうしてくれるんだと。

「なんだよー。まるで拉致されたみたいに被害者ぶっちゃってさ」

「いやいやいや、まさしく拉致だから。田井中、お前有無を言わさず連れて来たよな？」

「いーえ！任意同行ですー！」

「こら律！お前はさつきから――」

言い加減、律の不遜な態度は見えていられないと澪はたしなめるが、それをさわ子は制する。

「まあまあ秋山さん。

じゃあ田井中さん、斎藤先生に何の用事があったの？
見たところ、ただ単に一緒にお茶したかっただけじゃなさそうだから？」

そんな質問に律はハツと何か気が付いたような顔する。
そうだ、わざわざこの男を呼び出したのには理由があったのだ。
新入部員参加の喜びからか、すっかり忘れていた。

せっかくだから目の前の教師にも教えてみるか。なんて考える。

「そうそうさわ子先生！知ってた？斎藤先生ってさ――」

そう言っただけで机の脇に追いやられていた野球雑誌を手に持つ。

「わわっ！ちよつとやめてくれ！」

律が何をしようとしているか気が付いた裕は止めようとする。

それは単に気恥ずかしさから来た行動だが、そんな事をされたら余計に見せたくないのが律の性分だ。

「いーじゃんいーじゃん！」

ほら、見なよ。斎藤先生の知られざる過去ってね」

対象となるページを開き、さわ子の前に置いた。

「あら、なにかしら？」

.....

.....

.....

さわ子は最初は驚き「へー」「凄いのねー」等と感想を漏らし、わからない部分は質問を交えながらふんふんと読んでいたのだが、徐々にそのトーンは下がって行く。

さわ子は確かに野球の事はわからない。裕がここまで凄い野球人であつた事など、言われるまで気付きもしなかった。

しかし『斎藤 裕』という人物が年明け早々、どれだけワイドショヨーを騒がせたのかぐらいは知っていた。

何せ大学生のドラフト1位指名が入団拒否。

例えば希望球団に入りたくて駄々をこねる新人なら過去にいたが、裕はプロ入り自体を拒否したのである。

はつきり言つて前代未聞であつた。

（なんで私、この人の研修担当なんだろう...？）

記事を読めば読む程、そんな考えが頭によぎる。

気が付けばさわ子は神妙な顔付きになり、一言も発せずじただ雑誌を読みふけていた。

それからたつぷり3分程度経った頃、唐突にページを閉じると、それを手に持ちようやく口を開いた。

「ごめんなさい田井中さん。」

ちよつとこの雑誌、借りてもいいかしら？」

「へ？ああ、別に構わないけど——」

了承だけ得ると、さわ子はすつと立ち上がる。

「紅茶、ごちそうさま。お菓子も本当に美味しかったわ。」

それじゃそろそろ私達は仕事に戻らないといけないから——
斎藤先生、行きましょう」

「…………？」

あ、はいそうですね。

琴吹、ごちそうさま」

「いえ、またいらして下さいね」

最後は何か味気ない。

こうしてさわ子は裕を引き連れ、さつさと音楽準備室から出て行った。

……………

……………

……………

「なあ律、さわ子先生、なんか様子変じやなかったか？」

「…うーん、なんだろう？」

さわ子の様子に何となく違和感を持った澪。

律も同意するが、結局の所はよくわからない。

「うふふ、たまには大勢でお茶を飲むのも悪くないわね」

「あ、ああ…そうね」

紬は相変わらずばわわしていた。

その7！（後書き）

さわ子、裕の経歴を知るの巻。

てか8話も書いて未だに軽音部結成してないんですね…。

ストーリーは頭の中で決まっても、繋げ方が定まらない。
今更ながら文章書くのって難しいね！

この作品は実験作、習作と考えると執筆しております。前回に引き
続き、厳しいご意見、批評。お待ちしております。

その8！

「斉藤先生。ちょっと教頭先生の所まで行きましょう」

「え？」

職員室まで戻ったさわ子は、そそくさと自分のデスクに行こうとする裕を引き留め、そう述べた。その表情は何故か妙に険しい。

まさか音楽準備室で駄弁っていた事を怒られるのか。

いや、さわ子も共にした訳であるし流石にそれはないか。

裕は何事かと思いつつも、自身の研修担当の言う事だ。素直にさわ子に着いて行くのである。

さて、さわ子達の向かう先である桜が丘高校教頭。名前は早川はやかわ和夫かずおといった。そろそろ中年も半ばという年齢だが、体格や身のこなしはまだまだ若さを感じさせる男性である。

彼は桜が丘高校創校からの最古参の教師の一人であり、周囲の期望も非常に高い。同校の卒業生でもあるさわ子の在学中は、学年主任の立場で教鞭を奮っていた。

早川教頭は、さわ子が裕を引き連れ、もの凄い剣幕で近づいて来ていることに気付いていた。そのさわ子の手には野球雑誌が見える。どんな用件か、彼にとってその想像は容易であった。

「教頭先生！これは一体どういう事ですか！？」

さわ子のよく通る声が早川教頭のデスクを中心に響き渡る。

そのデスクの上には先ほど律から借り受けた、裕が特集される野

球雑誌が開かれて置かれた。

「あちゃあ、やっぱりばれちゃいましたか」

あくまでも飄々とした感じで早川教頭は返すが

「こんなことすぐにばれるに決まっています！」

すぐさまさわ子は切り返す。

結局3週間近くもさわ子は知らなかった訳だが、まあ祐の特異性を考えればよく持った方なんじゃないかと早川教頭は考える。

しかし本人まで連れて来る事はないだろうに。と内心毒づいた。これは相当頭に来ているんだろう。加えると、さわ子はこのような時に一切の遠慮はしない。在学中から顔見知りであった影響も多少はあるだろうが、実際はかなり気性の激しい女性なのである。

それ故プライドも高い。正直に言ってくれば良かったものの、口八丁で裕の研修担当に据えられたという、今ならば容易に想像出来る事実がどうにも許せなかった。

さて、さわ子が单身ならともかく、裕まで目の前にいるなら説明の言葉は選ばなければならぬ。どうしたもんかと頭を抱えなくなるが、早川教頭は淡々と説明を始める。

「まあ騙したつもりはないんです。

彼は言わば芸能人のような存在でもありますからね。

余計なプレッシャーを与えないためにも、あまり彼を知らない先生を研修担当に据える必要があった訳なんですよ」

「それはわかりますが、隠す必要はなかったんじゃないですか？
そもそも——」

「いや、だからですね——」

とまあこんな感じで早川教頭VS山中さわ子の言葉を用いた戦いが続く訳だが、裕にとってそれは、晴天の霹靂の如く予想外の出来事であつたに違いない。

職務についての話かと思いきや、2人は自分の事で言い合つていく訳である。もちろん自分の研修内容とは程遠いレベルでの話だ。それは裕には意味がわからない。聞く限り早川教頭とさわ子は、まるで自分が超有名人であるかのような口振りである。いや、実際そうなのだが、生まれ付き無自覚鈍感人間たる裕にとって、それは信じられない事であつた。先程の律達に然りだ。

「いや、ちょっと待って下さい。」

お二人とも何か大きな思い違いなされてませんか？」

だから、そう口を出すのは自然の流れであつた。

くだいようだが裕にとっては、という事を忘れてはならない。はつきり言つて大きな思い違いをしているのは裕である。

『……??.』

早川教頭のデスクを境に向き合つていた2つの顔が、ほぼ同時に裕の方向に向いた。

ちなみに早川教頭は「え？」というような純粹な疑問を向けた表情であり、さわ子に至つては「はあ？」とでも言いたげな露骨に嫌そうな顔が表れていたりする。

「あの、教頭先生。」

僕が芸能人だなんて、流石にそれはないと思うんですけども」

（突っ込むとそこかいー！？）

「いやいや、それはあくまで物の例えですよ。

君は世間様にとってそれぐらい知名度があるって意味です」

早川教頭はなんとか維持して来たその温和な表情に、1粒の汗を流しながら答えた。無論、前者の心の叫びはさわ子である。

しかし認識の違いというのは面白い。

そんな早川教頭の言葉を聞いた裕は、思いきりきょんとしてしまふ。

（……え??）

いったいこの教頭は自分に何を言っているのだろうか。

少しずつ裕の中で、自分が自身に持つ評価に対して疑問が浮かんでくる。

そう言えば先程、軽音部の暫定部長も自分に似たような事を言っていた事を思い出していた。

しかしどうにも信じられない裕は、捻り出すように言葉を繋ぐ。

「失礼ですが、先程からのお話を聞く限り、教頭先生は僕に対してものすごく気を使って頂いているとしか思えないのですが…」

その裕の認識は間違っていない。確かにその通り。学園上層部は裕に対して大いに気を使っている。

しかしそれは本人に対してはつきりと言うべきか。早川教頭は思案する。

だがその空いた間はさわ子が遮った。

「そりや当然でしょ？貴方が去年プロ入りを拒否してくれたお陰で、どれだけお茶の間賑わせたと思ってんのよ！言っとくけどアンタ超有名人なのよ？」

既にさわ子は自身の持つイライラを隠せていないのだが、そろそろ同情しても良い頃合だろう。

さて、いよいよ困ってしまったのが裕である。

さわ子にまで言われてしまうと、いよいよ自分の認識がおかしいという事実を現実視せざる得ない。

「あの、僕が有名人だなんてにわかには信じられないんですが…？」

「「はあ？」「」

とうとうさわ子と早川教頭の言葉が重なった。

同時に、さわ子は自身の中で、何かとても大事なものが切れる音がした。

ここまで来て、ようやくわかった事実。

先程、音楽準備室で生徒に自身の過去を追及されても不可解な程の落ち着き様。考えてみればその時点でわかる事だったのに。

そう。裕は、とんでもない鈍感だったという事実。

早川教頭は石の様に固まった。

さわ子は下を向き、身をプルプルと震わせた。

そして――

「信じられないのは お ま え だあああああああああ
！……！！」

さわ子の絶叫。

同時にスパーン！！という小気味の良い音が職員室に響き渡った。

さわ子は、手に持つファイルで裕の後頭部を思い切りはたいたのである。

「……むきゅっ」

その気合いの入った一撃で、裕、ぱたりと昏倒。

「教頭先生！」

「は、はい」

「これから斉藤先生の研修はビシビシとやらせて頂きますが、よろしいですね!？」

「……え、ええ。よろしく、おねがいします」

こうしてさわ子は裕の襟首を掴むと、その通り引きずって自らのデスクに戻って行くのであった。

見送る早川教頭はただ冷や汗を流すしかなかった。

ここまで感情を剥き出しにさせるさわ子を見るなんて、正に高校生以来の事なんじゃないだろうか。彼女の性格はわかっていたが、まさかここまで怒るなんて思わなかった。わざわざ裕の素性を隠した事を反省しつつも、その怒りの矛先が裕に向いた事に、内心ほっとしていたりする。

「しかし……。これは理事長に報告しなければなりませんねえ……」

早川教頭は一人ごちる。これは余計な仕事が増えてしまったと。

■
■
■
■

【SIDE：裕】

……その後の事を少し話してみようと思う。

その翌日、俺は理事長室に呼ばれた。

昨日の件で上から何か言われるのではと、なんとなく予想がついていたが、理事長室に入ってみると部屋の主である理事長は勿論の事、冲山校長、教頭先生と学園3巨頭が揃い踏みであった事に俺は少々面を食らった。

妙に眉間にシワを寄せてしまっている理事長は、俺に1つのスポーツ新聞を見せてこう言った。

「この記事に載る貴方と、目の前にいる貴方は同一人物ですか？」

「え？はあ。間違いないと思います……」

そのスポーツ新聞の1面には、大きな見出しでこのように書かれていたのだ。

『ファントムズ1位指名、斎藤 裕 投手（N教育大学）まさかの

プロ入り拒否!!」

随分と日付けの古い新聞をよくも大事に持っていたもんだと感心した反面、俺はかなり驚いた。まさかこんな風に記事にされていただなんて思ってもいなかったのだ。

実は昨日あの後、山中先生から俺の持つ特異性についてこんこんと説教された訳だが、はつきりと言って我が身ながら現実味のない話であった。何をふざけた話を…なんてどうにも信じる事の出来ない俺は話半分に聞いていた訳だが、この記事を見てしまうと、流石に俺の見解が間違っていた事を認めざるを得ない。

俺の返答を聞いた理事長は大きくため息をついた。

「はあー、それは良かったわ。

これで、実は同姓同名の別人で、勘違いしていたのはこっちの方だった。って線は消えたわね」

「良かったですな！理事長！」

それは安堵のため息であつたらしい。

相槌を打つように沖山校長が答える。

てか、そんな風に心配されていたのか。ここまで来ると何だか悲しい。

「早川教頭から聞きましたよ？」

貴方、自分が有名人である事にとことん無自覚だったそうね？」

「すみません。正直な所、未だに現実味に欠けるのですが…」

「TVとかも見ていなかったのかしら？あの当時はワイドショーか

ら深夜のスポーツニュースまで、全て貴方の話題で持ちきりだったのよ？」

「……あの辺りの頃は、お恥ずかしながら就職活動で手一杯でしてTVもほとんど観ていなかったんです」

俺は何とか納得出来そうな理由を即興で繋ぐ。

実は女子校にしか採用されなかったショックでほとんど塞ぎ込んでいたなんて口が裂けても言えないからな……。
しかし、ワイドショーねえ。信じられないな。

「——まあ良いでしょう。」

とりあえず貴方がとても有名人である事にはご理解頂けたかしら？」

「ええ。何とか」

その頷く様はかなりぎこちないものになってしまったのではないだろうか。その自覚はあった。

「わかりました」

理事長も頷く。

だがその瞬間、空気が変わったように今まで温和な表情を浮かべていた理事長が、真剣な顔付きに変わった。つられて俺も身構える。

「では、ここまで貴方が理解が及んだ事を踏まえて、私達には貴方に聞かなければならない事があります。」

——斉藤先生、貴方、今後も我が学園で教師を続ける自信があ

りますか？」

「え？あの、おっしゃる意味がよくわからないのですが」

「そのままの意味ですよ。」

今はまだ気付かれていないようですが、貴方が嫌っているマスコミがこの学校に来る可能性もあります。貴方を知る教師には、この事は漏らさないように厳命していますが、時間の問題でしょう。遅かれ早かれマスコミには気付かれるものです。

それに今回に限らず、今後は貴方の存在を知って騒ぎ出す生徒は更に増えて行く事でしょう。それは貴方にとって面倒な問題になるはずです。

そのような環境でも、貴方は教師を続ける事が出来ますか？」

この理事長の話は、今までの俺にとっては全く想像出来る事ではなかった。

「それは……」

これだけは出任せでどうにかなる問題ではなかった。はつきり言って女子生徒が苦手なのは否定できない。マスコミなんか相手にするのはもっと嫌だと断言出来る。

俺はどうにも答えが出ずに口籠ってしまっていた。

そんな態度に見かねたのか、理事長は再び口を開く。

「ふふ。貴方は本当に正直な人間ね」

「いや、なんかその……、すみません」

「いいのよ。こちらとしても、貴方のその正直で真面目な人間性に魅かれて採用に踏み切ったのだから。」

これまで長い事、教員候補と面接を重ねて来たけど、流石に貴方が初めてよ？女子校で“野球部の監督になって甲子園に行きたい”なんて言った人間はね」

「本当にお恥ずかしい限りです……」

今となつては本当にお恥ずかしい限りの黒歴史。

下手したらこれは一生いじられネタとして付きまとうんじゃないかと恐ろしい想像をしつつ、俺は、そんな自分を敢えて採用してくれたこの学園に恩義を感じていた。ここの内定がなければ正に就職浪人の憂き目にあつていた訳だし。

その報いとして、最低限一人前の教師にはなりたい。

「ただその点は私達も貴方に感謝しているんです。

斉藤先生の存在が、我が校の共学化に向けたプロジェクトを本格的にスタートさせたのだから」

「——え？」

理事長の言葉に、俺は驚いた。

その言葉が意味する事……。そんなことぐらい、流石に俺だつてわかる。

「ふふ、機を見て貴方に話そうと思っていたのだけどね。せつかくだから今話しちゃうわね？」

今まで共学化は検討段階に過ぎなかったのですが、今年度、我が校は本格的に共学化に向けた準備委員会を設立しました。あと2、3年を目処に、我が校は完全に共学校となります」

「——はい」

徐々に胸が熱くなるのを感じる。

「その際、課題になるのは男子をどのように集めて行くのか。という点です。」

ちなみに、我が校は野球部を中心としたスポーツ振興を狙っています。

——斉藤先生、貴方さえ良ければ。ですけどね?」

「えっと、それはつまり——」

「ええ。斉藤先生には、新設予定の野球部を任せようと思っています。」

それには校長先生も、教頭先生も賛成してくれているわ」

理事長の言葉を受け、沖山校長と教頭先生が頷いた。

「さて、ここまで踏まえて頂いた上でもう一度聞きましょう。」

——斉藤先生、今後も我が校で教師を続ける自信はありますか?」

諦めるしかないと思っていた、甲子園への夢が急に現実味を帯びる。

俺がどう答えたかなんて、言う必要はないだろう。

その8！（後書き）

裕、自身の非常識さが教師陣にばれる。の巻。

ちなみに裕に関してですが、ネームバリュー的なモデルも同姓の某日ハム新人投手に準じているつもりで書いています。

「裕くんいくらなんでも騒がれ過ぎじゃね？」

なんて思ってる方もいるでしょうが、例えばハンカチ王子がプロ行きません。なんてなったら、世間はそれなりの騒ぎになるはずですから。

ちなみに今回は前編PC執筆です。

ネカフエの6時間パツクまるまる潰してしまっただぜ！

2 / 14 ラストを加筆。

その9！（前書き）

どうも、万年試行錯誤中のまさきちです。
今回は節毎にサブタイをつけてみました。

なんか以前に拝見した小説がこんな感じでしたので
「かつちよいい！！」だなんて思いまして。

け、けっして文量稼ぎとかじゃないんだからねっっ！！！！

その9！

【少女は思い悩む】

その日、平沢 唯は悩んでいた。

（うわわわわ……。どうしよう。私バンドなんか無理だろう……）

軽い音楽部はちつとも軽い音楽活動じゃありませんでした。

どうにかこうにか所属する部活動が決まったものの、幸か不幸か頼れる幼馴染みの助言を聞いてしまったおかげで、軽音部の真の活動内容を知ってしまった。

そう。一気にやって行く自信が無くなってしまったのである。

となると、やはり入部を辞退させて頂くしかあるまい。

そこまでは腹の中で決めたものの、残念ながら面と向かって断る勇気を唯は持ち得ていなかった。なんせ相手はバンドである。いわゆるロッカーである。

クラ●ザーさんのような方が出てきて『このオトシマエどう付けてくれるんじゃゴルアアア！！？』と脅されてしまうに決まっている！

ある意味想像力（妄想力）豊かである唯は、バンド活動家に対して大いなる偏見を持っていた訳だ。大変失礼甚だしいが、それが唯である所以なので、ご愛嬌という事でご理解頂きたい。

ちなみに唯は、今回も頼れる幼馴染みに素直に頼ろうと思った。

「お願い和ちゃん！部室まで一緒に着いて来て！」

「うん、それ無理」

即答だった。

唯は悲しみに明け暮れた。

しかし現実というのはやはり厳しい。

悲しみに明け暮れて自身の願望が叶う世の中ならば、それこそ世の中ニートだらけになってしまうだろう。

幼馴染みにも見捨てられ、その日最後のHRが終わった後も、まるで裁判所から差し押さえ勧告を受けた多重債務者の如くに蒼白の表情をして自身の机から動かなかった唯だが、さつさとどいて欲しい掃除当番の圧力までは流石に逆らう事は出来ない。

大いに不本意ながら、ふらふらとその足を音楽準備室へと向けた。

■ ■ ■

【頂点と裏側】

「うーん、今日は最高に良い朝だ！」

その日、斉藤 裕は有頂天だった。

昨日、西崎理事長から発せられた「桜が丘高校共学化決定！！」

その言葉は、超人気アニメの原作が再開される事なんぞ霞むぐらに脳内での一面記事を独占させていた。

これで、諦めかけていた自身の夢を再び追うことが出来る。

まあ、それを知るまでの経緯が多少複雑だったのは否めないが、そんな事は今の裕にとって問題にはならないのだ。

さて、そんな裕であるが、確かに理事長は新設予定の野球部を自身に任せてくれると言った。だが、そこにはこんな条件があった。

『斉藤先生には、この2年で1人前の教師になって頂きます』

それが、裕に課された課題であり、まあ教師を志した社会人ならばある意味当然の義務でもある。

ちなみに西崎理事長が敢えて裕に対してそんな課題を与えたのは、もちろん理由がある。それは桜が丘高校が『学校法人』として、単純な営利団体でない事が原因である。言うならば気にするべき問題は世間での風評だ。

つまり桜が丘高校が共学校になり、野球部監督として『斉藤 裕』が誕生した暁、それが中身の無いハリボテ教師であってはならないのである。

それは裕が野球部監督となれば、また世間ではそれなりの話題になるだろうという憶測が大きい。そんな中、例えば意地の悪い週刊誌などには「桜が丘高校、野球部新設のため、あの斉藤 裕を買収か!？」なんて記事すら書かれかねない。その逆もしかり、裕に対してもあることないこと、誹謗中傷を含めて様々な根拠のない憶測がマスコミ中を飛び交う事だろう。

生徒を集めなければならぬ中、そんな低俗な風評に塗れてしま

う事は私立校にとって憂慮すべき問題である事をご理解頂きたい。
だから、裕は早く教師として一人立ちすべき人間なのだ。話題性
だけが先走ると禄な事がない。人生を裕の一回りも二回りも重ねる
学園上層部の人間達は、それをよく理解していた。

さて、そんな裕には、やはり先生の先生。裕を正しく導く存在が
必要である。

この桜が丘高校では「研修担当」という役職がそれに当たる。

当初さわ子が担当であつたのは、裕を簡単に辞めさせては困ると
いう事から据えられたものであるその心は、最初の内は甘い蜜を吸
わせてやろうという考えであつた。

無論、上層部はその変更を考えていた訳だが、そこはさわ子本人
の強い希望によって続投が決定された。さわ子としては当て馬のよ
うな扱いをされた事がとことん許せなかつたようだ。

『だったら私がやってやろうじゃないの！舐めんじゃないわよ！！』

それがさわ子の決意表明であつた。

宣言された早川教頭は、その迫力にたじたじであつたらしい。そ
もそもさわ子が裕の担当に着く事は理事長からの意向であつたのだ
が、早川教頭自身は賛成とは言い難い心情だつた。だが、特に反対
を進言した訳でもない。流石にこの日ばかりは中間管理職独特の哀
愁が溢れ出ていたという。

それはともかく
閉話休題

さて、とりあえず有頂天な裕君の現状をお送りしてみよう。



【新任教師の挑戦】

「とりあえず、斉藤君には教師として決定的に欠如している生徒とのコミュニケーション技術を磨いて貰うからね！」

「……コミュニケーションですか？」

とある日の朝、授業に行こうとする裕を捕まえたさわ子は『本日の課題』とばかりにそう宣言した。

ちなみにさわ子は裕に対してはそれなりの地を見せるようになったのか、呼び方や口調が少し変化している事を明記して置きたい。

まあ裕を物理的にノックアウトした手前、今更おしとやかキャラを通すのも無理があるというものだ。それ故さわ子は裕に対して遠慮するを止めたのだった。

その一方、その他教師陣には従来のキャラを変える事はないので、それを目の当たりにする裕は女の恐さを知るのだがそれはまた別の話。

「そうよ」

裕は昨日の理事長の発言から、これから様々な試練を課される未来を薄ぼんやりと想像していた。無論、夢のためだ。どんな事でも前向きに頑張っていこうとそれなりに気張っていたが訳だが、正直一番苦手と自覚する部位からやらされるとは思わなかった裕は、困惑した表情を顔にしながら聞き返す。

「ええと、具体的にはどのように……？」

「まずは授業からよ。少しずつで良いからその単調な授業スタイルを改めなさい。授業を合間に質問を促す時間を作ったり、設問を生徒に解かせたり、色々やりようがあるでしょう？」

「……わかりました。努力します」

「私は担当科目が違うから細かく教えることは出来ないけど、要はキミの努力する姿勢よ。学校側はそこを求めているって訳。その内、生徒にも評判とか聞くからサボらずちゃんとやるのよ？」

「は、はあ」

朝一の気分の良さは一体どこに消えたのか。
裕は早速滅入りそうな気持ちになってしまった。

……

……

……

「ええーと、奈良時代は終わったから、次は平安だな……
はい、じゃあ教科書の28ページを開いて——」

（はあ、なんだこれ。授業がこんな疲れるものだったとは……）

その日の授業が始まる。

結論から言えば、裕は最初から憔悴しきっていた。

今までは教科書を開かせ音読は自分でこなす。要点だけ板書し、生徒にノートを書かせる。裕の担当は歴史であるが、歴史上で起きた重要な事柄に対して所感を漏らす訳でもなく、あくまでその事実だけを淡々と語る。

そんな一方通行と言っても差し支えない授業を展開してきた裕にとって、いわゆる「対話型」の授業に切り替える事は苦痛を伴う事だった。

自他共に認める女子苦手人間の裕は、まず教科書を読ませようと生徒を指名しようとして……、固まった。「適当な生徒を指名する」だけが、誰にしていいいかわからなかったのである。勿論、席順や名簿順に指名していきなり、適当なりにやりようがあっただろう。

しかし、ものの見事にテンパった裕には、そんな簡単な事にすら気付かなかった。

授業中寝てる生徒も“初めて”起こす事を試みた。

だが、裕は生徒に触れる事をためらい……、スルーした。

授業中、突然壇上から寝ている生徒の下へ向かい、数秒間立ち止まった後慌てて教卓へ戻り、咳払いをすると何事もなかったかのよう授業を続ける。その光景はシユールの一言に尽きた。

結局寝ている生徒は、雰囲気を感じた他の生徒に起こされるのだが、その醸し出してしまった異様さを自覚し、顔から火が噴き出る思いをしたという。

（こんな事ではダメだ！気合いを入れ直さなくては！）

裕はこう見えて逆境にはとことん強い。高校、大学と強豪校でエースを務め上げた実績は伊達ではない。こんな事、ノーアウト満塁、

一発逆転サヨナラのピンチを喰らったあの頃に比べればなんて事ないのだ。

そして気を取り直して翌時間、慣れない成りに懸命を授業をこなす裕は、またもや睡眠真っ最中の生徒が目に入った。

（むむ！よし、次こそ！）

今度こそきちんと生徒を起こして教師らしい姿を見せなければ。これ以上は色々とまずい。羞恥心的な意味で。

裕は手に持つチョークを黒板の受け皿に置くと、名前を間違えないように教卓から生徒名簿を取って、気持ち良く寝ている生徒に近付いた。

「うっ~~~~ん……………う~~~~い~~~~……………もう食べられないよ~~~~……………
Z Z Z……………」

平沢 唯だった。

「……………」

裕は無言のままスパーン！！という小気味の良い音を伴わせ、手に持つ名簿で唯の頭をはたく。なんだか勝手に手が出してしまった。

「あいたあ!!」

「起きたか？」

「ちょ……、斉藤せんせえ……。いきなり叩くなんて酷いよう」

唯は涙目にしながら、目の前の教師を訴える。

「それは悪かった。だが今は授業中だ。わかるな？」

「……すいませ〜ん」

学校に来ていたとは考えられない唯の見事な睡眠っぷりに、加えてその幸福を3乗したような屈託のない寝顔に、なんだか無性に腹が立ってしまったのだった。

（うつわ〜やべー、叩いちやったよ……）」

だが、当の本人は己の軽率な行為を後悔した。それこそ唯を起こしてから教卓に戻るまで心臓がバクバクになるぐらいに。

何故なら、唯を叩いてしまった事により、教室中の視線が集まった事を自覚してしまったからである。

裕は「暴力教師」なんてレッテルを貼られたらどうしよう、だなんて心の中で慌ててしまった訳だが、真相は少し違ったりする。

（まったく、ようやく唯のこと怒ってくれる先生がいたわね……）

真鍋 和がそんな心情を抱いたように、教室にいる生徒達もみんな似たような感想を持っていた。

大体、授業中に寝ている方が悪い。たまたま寝てるだけなら可愛

いものだが、毎時間のように授業を睡眠時間に充てている唯は、いい加減怒られないと逆におかしい。

女子校故か昨今の教育情勢故か、矢の如くに厳しい教師というのはこの桜が丘高校には少なく、裕は唯に対して、効果的な一喝をお見舞いした初の教師となったのだった。

外目から見ればこれで、裕は些細ながらも教師としてのスキルアップを果たしたかのように見える。

しかし現実というのはやはり厳しい。

はつきりと動揺してしまった裕はその後チグハグな行動を続け、結局、彼が教師らしい行動を見せたのは、これがこの日の中、最初で最後だった。

■ ■ ■ ■

【そして放課後へ】

「……と、まあ本日はこんな感じでした」

要するに『じゅぎょうはとってもたいへんでした!』

放課後、さわ子はそんな内容の授業レポートを受け取った。

勿論研修担当として残念な点は是正せねばならない。その後、かくしかじかな感じで話を聞いた訳だが。

「あんたやる気あんの？」

正直頭に来た。

さわ子は思わず目の前の箱入り新任教師に凄んでしまう。

眉間にシワを寄せ、そのドスの効いた声色も合わせてその表情はかなり恐ろしい。

「いいい、いや、ま、まあそのあるっちゃあるんですが……」

（あ、しまった……）

心からビビっている裕を見て、さわ子も毒気を抜かれて温和な表情に戻しつつ、心の中では盛大にため息を吐いた。

ちなみに早川教頭から『頼むからあまり素を見せないでくれ！』と再三に渡り悲痛な要請を受けていたりする。

しかし参った。効果的な処方箋がわからない。

「うーん。悪いけど、これもう女子が苦手とかそんな領域を飛び越えてるとしか思えないわね。斉藤君、キミ恋人とかいた事ないですよ？」

ちょ、貴方そこ聞いちゃいますかそうですか……とでも言いたげながらも何も答えない裕。

とりあえず彼からしたらリア充は爆発でもしとけと言っておきたい。

「……その無言は背呈と受け取るべきかしらね。
もしや童t……、いや、そうに決まってるわね……」

「ちよつとぶつぶつ男の尊厳を傷付けないで頂きたいのですが」

「さては素人童t…」

「いえ！純潔です！！」

「……………」

「……………」

「……正直その年でそれかどうかと思うわよ？」

「……………//」

裕は墓穴を掘った。

■ ■ ■

【少女と新任教師は再び出会う】

「……ああー、もう嫌だ。不幸だ。災難だ」

時と場合によって、男というのは想像以上にガラスのハートを露呈させる。

正直ちよつと憧れの先生だった。裕も年頃の青年男性なのだ。メ

ガネの似合う美人の女性教師相手に下心を出さぬ方がおかしい。しかしその高みに到達するには様々な意味で経験不足であった。

「しかしなんだこれ…… “高校” ってどこもこんな雰囲気なのか？」

職員室からフラフラと昇降口に向かう裕だが、その課程で様々な生徒とすれ違う。

なんと言うか…… “みんな輝いている” のだ。

どの生徒とすれ違ってもこんな自分に笑顔で挨拶をしてくれる。遠目に見える生徒達はお喋りに夢中だが、どれも元気に溢れている。

そう言えば、自分の高校時代はどうだったのだろうか。ふと思い返す。

思えばちやぶ台返しがよく似合いそうなスパルタ親父の長男として生まれ、物心ついた時から野球ボールを握っていた。中学はシニアリーグで硬式ボールに切り替え、高校では強豪校のエースとして甲子園の一步手前まで迫り、大学時代は全国優勝まで上り詰めた。しかし幸か不幸かその厳格な体育系序列社会は、裕に女の影を踏ませなかった。

勿論、裕と同じような環境に身を置いていた元チームメイト達は、なんだかんだ上手い具合によりしくやっているものである。

しかし裕は悲しいほどその社会で素直だった。実直に監督やコーチの話を受け止め、意固地なほど練習に打ち込んだ。それでいて、自身の夢だけはどうしても頑固に譲らなかった。

そう、それは熱い青春だったが、一般普遍的に必要な要素が欠けていたのだ。

高校。それは裕にとって初めて触れる「社会」だった。

（そうだ。俺は“ちゃんとした青春時代”を過ごしていない）

（女も知らない。アホな事して騒いだ記憶もない。酒飲んだって酔い潰れた事すらない！）

（——こんな俺に“教師”なんて務まるのか？）

階段を最下段まで降りた時、そんな考えに陥った裕は、目の前が真っ白になった。

それは彼にとって絶望に近い感情だったかもしれない。

だが、そんな時である。

「あいたっつ！！」

前が見えていなかった所為か、裕は近くにいた生徒とぶつかってしまった。

「あ！済まない！

………って、平沢か？」

「こちらこそごめんなさいっ！！

………って、あ、斉藤せんせー」

「悪かった。ちょっとよそ見してて……」

そこまで言い繕って裕は気付いた。

唯の樣子が何かおかしい。何故か泣きそうな顔になっているのだ。

.....

「お、おい……、どうした？」

「さ、斉藤せんせえ……」

「そんな痛かったか？なら保健室に……」

「助けてええええええええええ！！！！！」

「……はい？」

ゆう
は
こん
らん
した
！

その9！（後書き）

改めましておひさしです。

投稿をPC執筆に切り替えたものは良いもの
これがまた1台しかない家族共用パソコンでして……

姉「なにやってんのー？」

私「ちよつつ／＼見ないで！！」

そんなエ●サイト隠すような攻防を続けた後、
なんとか次話投稿まで漕ぎ着けました。

次回こそけいおん部結成だぜ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3464q/>

とある新任教師の受難【けいおん！二次創作】

2011年2月27日11時48分発行